
魔法少女リリカルなのはstrikers 転生者黒猫の物語

マサン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはs t r i k e r s 転生者黒猫の物語

【Nコード】

N 3 8 4 6 Q

【作者名】

マサン

【あらすじ】

俺、雨宮樹《雨宮樹》ことレイン・フィレスは転生者だ。しかし俺はこの物語の組織の気持ち悪さを知っていたことから一つの作戦を立てた。それは俺の容姿がブラックキャットのトレインであることから考えたいろいろ裏やってる管理局の上層部に不吉を届けることだ

異論は認めん俺はやる！！

物語が始まったらうまく乗るか

さあ・・・不吉を・・・届けにきたぜ

プロローグ 「はっはっは、可愛い正義だなぁ〜おい神様よ」 (前書き)

はじめまして。マサンといいます初投稿、初小説です

これは魔法少女リリカルなのはstrickersの二次小説です。

原作とかけ離れたり、キャラ崩壊があるかもしれません

また別のアニメ、漫画の技や歌などです

そのため「魔法少女リリカルなのはstrickers」のファンの方は気分を害するかもしれません

オリキャラ最強です

それでもかまわないと言う方はどうか

温かい目で見てください

ブローグ 「はっはっは、可愛いは正義だなぁ〜おい神様よ」

本作は s t r i k e r s の四年前を少しやってから現代に移ります
それではどうぞ

「すみませんでしたっ!!」

・・・どこからつつこもつか

俺の名前は雨宮樹

あまみやいつき

ゲームや漫画をこれなく愛する高校一年生だ

そんな俺のはまってるアニメはやはり

リリカルなのはシリーズだが

それと並ぶぐらい好きなのは

武装錬金やブラックキャット、封神演義などの少し前の漫画

またマクロスFなどのロボットアニメ（まあこれは歌が好きな
だが・・・）

そんな俺の前に金髪金目のいかにも神様が立っていた

「間違えて年齢を見ずに殺してしまいましたすみません!!」

「・・・はぁ・・・まあそうですかこの空間にいる時点でいく
らか覚悟してましたけど・・・」

アレかつ!! 二次小説などでよくある転生の前触れ
イヤッホーっ!! といきたいところもあるがどちらかというと残
念のほうが

圧倒的に多いかもしれない

いやうれしいのは確かだし、かしまだ俺は自分の趣味も見つけず迷っていたのだ

「本当ですか！ーいやあーよかったー間違えて殺しちゃったからきつと

ぶつかってくることを覚悟してたんですよー
まあ察しのとおり転生してもらいます」

急に顔を上げ満面の笑みで俺を見つめてくる神様
結構可愛かった

「というわけでーまあチート行きますか？」

「もちろん」

「だったら、全部で5つまで決めさせてあげます」

5つか・・・これは結構よさそうな能力を選べそうだな

「そうだな・・・その中には魔力をありえないくらい多くしたりするのや自分の容姿も含まなきゃ駄目か？」

「いえそれは含みませんーだってどうせイケメンにするんだからー
関係アリマセン」

「じゃあ行くぞ」

「どうぞ」

やけに間のびした話し方する女だなまあいいか

可愛いし。いや〜可愛いって正義だね

「まず、容姿だが俺が大好きなブラックキャットのトレインで魔力はSSS+で、能力だが・・・そうだな
デバイスはハーデイスのインテリジェントデバイスで能力強化よろしく

そのほかに武装錬金の核鉄^{かくがね}1からC(100)までこれで二個だな

あとは歌姫能力で

任意でシェリルになれるようにして

後は・・・それのおとしもののイカロス、ニンフ、アストレアの能力全て

を任意で羽も出せように

最後に封神演義の宝具^{パオベイ}を全て

入れる袋もつけてくれ

これで5つだ」

「うわっ、超チート〜まあこのぐらいなら簡単だけど大丈夫なの？黒いのに汚染されない？」

たぶんこの女神が言っているのは黒い核鉄のことだろう
1と3にある黒い核鉄の力しかしそれも問題は無い

「だって、2があるし大丈夫だろ」

「ああ、それもそうね」

とまあこんな感じでチートな俺が完成した

「それじゃあいつごろがいい？」

「そうだな、やりたいことがあるから s t r i k e r s 開始前の4年前に送ってくれ
年齢はなのはたちにあわせて」

「場所は？」

俺がやろうとしていることをやるためにはこの場所がいいだろう

「ミットチルダだ」

「おつけ〜それじゃあ行つてらっしゃい
黒い子猫ちゃん」

「おう、いろいろありがとな神様」

「私の名前はフォースよ」

フォース・・・リインフォースと同系列の名前が
いい名前だな

「ありがとう」

心を読むな

そう言おうとしたが光に包まれて見えなくなった
さあ俺の物語を始めよう

ブローグ 「はっはっは、可愛いは正義だなぁ〜おい神様よ」(後書き)

さてとブローグに続いて次も作るぞ〜

ちなみに言つと作者ははやてが好きなので出来ればはやてとくつつける予定です

第一話「まさかのしょっぱなから素顔を見られるとはマスターも馬鹿ですねw」

さて、一話です

最初のほうから時間が飛びますが機にしないでください
すぐにキャラ設定も投稿します

大幅修正をしました

英語は苦手なのでわかる範囲でかいています

第一話「まさかのしょっぱなから素顔を見られるとはマスターも馬鹿ですねw」

レイン side

「98〜99〜100・・・」

神様つて・・・何でも出来るんだな・・・」

現在、俺はとあるマンションにいる

そして財布には100万

この世界に下りてきたときにすでにチョーカーになっている俺の武器ハーデイスがあった

しかもしたには首輪がついている見事にすずつき

『私の中にある情報であなたの当分の住み場所への地図と鍵が入っています』

まずはそこまでいきましょう』

「・・・ああそうだな」

そしてついたのはなかなか高級なマンションだった

「これもフォースの陰謀か？。まあいいか」

部屋に入りリビングに行くと軽くスパコン並みにありそうなパソコンと携帯端末。

うほっ！しかもこれも結構な容量」

「さてと……ちやっちやと情報出しちゃいますか」

『何の情報を出すんですか？』

「ん？……この世界の管理者である管理局の汚職等

まあまあ腐ってるんだろ……まあ見なくてもわかるけどね
」

俺はそらのおとしもののツンデレキャラ？のニンプの能力であるハッキングを使い

管理局のパソコンにハッキングした

すれば出てくる出てくる汚職が出てくる

横領、もみ消し、脱税に、麻薬取引、

あつと機械人間事情か……まだまだボタバタと出てきやがる

おっと人身売買までありやがる……

「マジかよ……これ全部あわせると3000人ぐらいいるんじゃないのか？

しょうがない……ハーデイス、とりあえず上層部だけピックアップしてくれ」

『了解』

携帯端末にハーデイスから来た情報を見ると

「チヨイ待て、一等空佐、陸佐それに提督から中将まで合わせて軽く50人はいるって

ほぼ全員じゃねえか！！ドンだけ腐ってんだよ！！腐りすぎだろ

馬鹿なの！？ねえばかなの！？」

『騒ぎすぎです』

上層部でもほんの一握りの人間だけだと思っていた
ほぼ全員とは・・・こりや骨が折れそうだ

『すぐに不吉をおこないますか？』

「いや・・・まずはお前に慣れるために一年まつ
そのために一年、時間を必要だったんだ」

パソコンを閉じ準備をしていると俺は一つ忘れていた

「そうだ！、戸籍偽造しなきゃ」

『最初から偽造なんですね・・・マスター』

パソコンをもう一度開きハッキングで自分の
住民票を作る

「名前か・・・そうだな・・・

俺の元の名前が雨宮樹だったから・・・雨・・・レイン・・・
そうだ！！

俺の名前は今日からレイン・フィレスだ！！」

『フィレスの意味は？』

「特に無い、なんとなくだ」

というわけで俺の名前はレイン・フィレスになった。

まあ、修行のシーンは飛ばして一年経過ってことで（べっ別にめんどくさいからじゃないんだからね！！）

一年後

「さてこれでほとんどのお前の使い方と魔法と宝具、核鉄の使い方はマスターしたはずだ

ジャミングという帰るぞ」

『オッケーですマスター』

またまたニッフの能力を使いいくら強力な魔法を使っても感知されないようにして

一年間の修行をし雷の性質変化も完全にマスターし

本編のトレインがレールガンは一日4発が限界だったが

俺は6発まで可能になった（それ以上は出来るが体に負担がきつい）

「今夜、このレムス少将に（不吉を届け）に行く

犯行予告のメールを管理局に送ってくれ」

『本当にいちいちこんなことをするのですか？』

「馬鹿やろう、犯行予告大切だぜどつかの怪盗のごとくな」

家に着き今夜のために昼寝でもするかと思っていたらいきなり入り口のベルが鳴った

「…………誰だよ、俺は眠いのによ」

このとき俺は知らなかったこの失敗が後々に響くなんて

「ハイ…………どちら様ですか？」

何事もなくそのままで出ると

「あつ！！はい隣に越してきた

八神といいます、あいさつ回りにきたんですけど？

お邪魔でしたか？」

（まつ…………まじかよ…………どうすんだよ）

「チョツ…………ちよつとまっててください」

レイン side end

はやて side

「チョツ…………ちよつとまっててください」

中から聞こえたのは男というよりも青年の声だった

「どんなやつが住んでるんだろうな？」

「ふむ、声からして主とあまり年はかわらんのではないか？」

わたしの後ろでヴォルケンリッターのシグナムとヴィーダが話している

そのほかにシャマル、ザフィーラの四人はわたしが9歳のときからの家族や

まあそんなたわいも無い会話をしているとガチャガチャという音の後扉が開き一人の男が出てきた

「すみません、寝ていたもんで」

「……ちよつとまった！なんやこの人めっちゃかつこいいノノ背もそれなりに高いし……軽く175はあるで！！

黒髪のロングに金色の目……けど何で首輪してるんや？それにすずも

「?……どうかしましたか？」

「えっあっはい、わたしが八神はやていいいます。よろしゅう」

「ああ、俺はレイン。レイン・フィレス。15歳だよろしく」

お互いに握手を交わす

このときわたしは一つ不思議なことに気づいた

「15?………同い年か!?………そうはみえんな、大人っぽいし……

一人ぐらしか？」

「えっ……ああ、そうだけど……わかる？」

ふうん、一人暮らしわたしと同年でそれはすごいな

わたしがそんなことを考えている横で

シグナム、ヴィーダ、シャマル、ザフィーラがそれぞれ握手を交わした

わたしはそんなときレイン君に一つ聞いた

「一人暮らしなら料理もあんまり作らんとちゃうか？」

「いや、別の普通には作る、今度もって行ってやるうか？」

「おお、そらうれしいわーそんなじゃよろしゅうな」

「おう」

・・・できるってどのくらいやる

まあ一人暮らしで大丈夫いっとるんやからシャマルよりはできるやろ

はやてside end

レインside

失敗した・・・これは後いろいろ響きそうだな・・・はあまあばれちまったもんは仕方がねえか

『マスター・・・どうしますか？

あの肩はたぶん・・・この後もかわって来ますよ」

来たらしょうがねえ、返り討ちにするまでだ
それに俺が負けるとでも？

『まあ負けたらわたし達は確実に独房行きですけどね』

そんなことよりも送り終えてるよな

『もちろん』

だったらそろそろ・・・

(ちよっ！！それはほんまか！？シグナム)

(ええ。少将が今すぐ来るようにと)

(これがホントだとしたらこいつはとんでもなく自分に自信がある
んだな)

(そんなことよりも早く行くで、みんな)

(())()はいっ(おう)！！())()

「プッ・・・あわててるあわててるwww」

『・・・極悪ですねマスター』

さしてよ夜まで寝るか

『何時ごろに起こしますか？』

開始が十時だから……7時で頼む

『おやすみなさいマスター』

おうお休み……というかこの会話

全部アイツ俺の思ってることを勝手に会話にしてるんだけど……
・まあいいか……

レインside end

再びはやてside

なんやなんやレムス少将のところに面白い犯行予告がきたって言うから

来て見たら早速少将の部屋に導かれた

「八神はやて一等陸尉入ります」

まあ今、少将の家に来てそれを確認させてもうところだった

「おお、八神一等陸尉よく来てくれたこれを見てくれ！」

なんといつても犯行予告がきたんやからな
シグナムたちと一緒にその犯行声明を見るとそこにはこう書いてあった

今夜、10時にあなたの元に不幸を届けに参上いたします

止められるものなら止めてみてください
あなたに止められるならですがね

ブラック・キャットより

「このご時世にこんなアホみたいな文送るやつは初めて見たわ・・・」

でも、さっきも家でヴィーダが話しておったが
それだけ自分の力に自信があるってことやな

「もしものため、今、高町なのは二等空尉とフェイト・T・ハウラ
シオン執行補佐官にも強力を要請している」

ちよつとまつて！、なのはちゃんとフェイトちゃんも来るのか！？
そら、犯人さんかわいそうやな！SランクとニアSが大量に集まる
んやから

「そつ、そうですか、それじゃあ配置などはこっちでやらせてもら
います」

「ああ、かまわない、好きにしてくれ」

わたし達は敬礼して部屋を出ると隣でシグナムがすでにうずうずし
ていた

（うわっ、出た！、バトルマニア）

「ふむ、主、わたしを一番正面に配置してくれ！」

「ちょっとまったシグナム。よう考え
そこから来るとはかぎらへんよ」

「いや!!、きつと前からきます!!
だからお願いします」

駄目や・・・すでに頭が戦いのことでいっぱいになつとる
こつなつたらもう手のうちようがないな

「わかつたわ。正面に配置やな」

はあ、もうちょっと静かになつたらええんやけどな
はやての苦勞は続くのであつた・・・

はやて side end

レイン side

夜十時30分前

「へっ、なかなか人が集まつてんな」

『入り口には、管理局屈指の烈火の将シグナムですか・・・
裏から回りますか?』

「馬鹿やろう向こうはお望みだ、正面突破!!」

あいつの性格はわかつている、しかし!!
それだけでは俺には勝てないことを教えてやるぜ

十時

「行くぜ、ハーデイス!! セットアップ」

『Stand by・Ready Set up』

セットアップしたときの俺の服装はクロノスのコートに特殊なフィードをつけたものにした

武器の形状はもちろんハーデイスそのまま

「行くぜ!! 不吉を届けに……」

俺は夜の街を走り始めた

第一話「まさかのしょっぱなから素顔を見られるとはマスターも馬鹿ですねw」

小説は難しいな〜まあ次回もがんばります
目指せ一日一更新（エイエイオー！！）

キャラ設定だよ（前書き）

というわけでタイトルのとおりキャラ設定です

キャラ設定だよ

さて、今回はキャラ紹介だよ

レ「紹介することあんのかよ？」

ままつ、いいからいいから

レイン・フィレス（元：雨宮 樹）

15歳

不幸届け人（仮職）

魔力量SSS+

魔力光 ハーデイス時のみダークブラウン

デバイス

ハーデイス トレインと同じ13の傷が入った銃

レインのことを慕ってるんだか慕ってないのか

よくわからないインテリジェントデバイス

2ndモードはまだ不明

バリアジャケットはトレインのクロノス時代のジャケットに
顔隠しのためのフード

銃用のホルスターの位置は膝ではなく後ろの腰にしてある

そのほかに宝具バオベエと核鉄かくがねは非殺傷設定が可能になっている

また宝具バオベエの一部は形を変えている

なぜなら形があまり好きではないからだ

具体的にいうと金蛟剪きんこうせんと雷公鞭らいこうべんの二つは

形が気に入らないため金蛟剪ははさみ型から銃に替え

雷公鞭は短い鞭に変えた

その他はほぼ漫画『封神演義』と同じになっている

核鉄はそのまま

イメージCVはBLACK CATのトレインと同じ近藤 隆です

レ「容姿は？」

お前が自分でトレインの容姿でっていったる

レ「ああ、そうだったな」

まあ次回は一気に不幸を届けに行くのでまっついていてください
ホラ、レインお前も一言

レ「んゝ・・・そんじゃ

こんな駄作だがこれからも読んでやってくれ」

キャラ設定だよ（後書き）

それじゃあ次回もお楽しみに

第二話「俺は間違っているのか？」（前書き）

はい、この前の作品でコメントをいただきました
ありがとうございます

今回もがんばりたいと思います

レイン君の性格は少しずつ変更していきます

第二話「俺は間違っているのか？」

シグナム side

「・・・・・・・・きたか・・・・・・・・」

私はバリアジャケットを装備し、自分の武器レヴァンティンを抜いた
その瞬間その剣にとつともない衝撃が走った

「貴様・・・・・・・・何者だ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・時間がないから一気に決めさせてもらっ」

フードをかぶった男は消えたと思ったらずに私は地に伏せていた
そして私はそのまま意識を失った

シグナム side end

レイン side

・・・・・・・・・・軽めに殴ったら大丈夫だよな・・・・・・・・

『大丈夫でしょう』

それにしても一瞬でしたね。

一瞬で後ろに回りこみ首に一撃、見事です』

「……時間が無い……早くしなければこの作戦は失敗だ」

そう、本当ならばシグナムとの戦いを楽しめたかったのだが
今の俺はブラック・キャット……結局は不幸を届けるといっ
ても

犯罪者になるんだから時間はかけられん

『仕事になると、性格が変わりますね』

戦いはいつも非情だ

どこかの誰かが言っていた

そして俺は屋敷の扉を開けるとその瞬間、桜色と黄色のチューンが
体にまとわりついた

レイン side end

なのは side

「にやはは、甘いよ。犯罪者さん」

私とフェイトちゃんてバインドをおこない

ブラック・キャットという犯罪者を取り押さえました

「デバイスの不法所持と住居侵入罪であなたを逮捕します」

「……………」

フェイトちゃんが男に近づきそのかぶっていたフードをはずすとそ
こには頭が無く

こう書かれていた

はずれ

「甘いな。まずは相手の武装の解除だろ。そうしなきゃこうなるぜ」

私たちは誰も反応できなかった

フェイトちゃんですら出来なかっただろう

なぜなら普通、バリアジャケットを脱ぐなんて非常識なことは行わないからである

しかし、男はそれを行った。

そしてフェイトちゃんが気づいたときにはもう遅かった

男は銃を突きつけていたからである。

顔は後ろを向いていて見えないが声からして私たちと対して年齢は変わらないだろう

「えっ!？」

「ごめんな……少し眠っててくれ」

パンツ!と乾いた音の後フェイトちゃんは倒れていった

しかし男は地面に落ちる前にフェイトちゃんを抱きかかえ地面に置いた

「フェイトちゃん!!」

「大丈夫だ、気絶しているだけだ」

男はフェイトちゃんが持っていたバリアジャケットを着なおすとフードを最後にかぶり

再び私たちのほうに向いた

「……………何が目的ですか？」

男は、武器をしまいこうつぶやいた

「俺は…………不幸を届けるだけだとまるわけには行かない。
それに今のお前らじゃ俺に勝つのは無理だろうな」

「……………やってみなきゃわかりませんよ」

そう、いくらシグナムさんとフェイトちゃんを倒したとはいえ
二人とも油断していたからだそうじゃなきゃたった一人に負けるは
ずが無い

「レイジングハート」

『大丈夫です、行きますよマスター、（Accelerate Shoot
er）』

「アクセルシューター！！」

私の後ろから20発の魔法弾が男に迫る

しかし、男はまったくあせっておらずむしろ余裕そうにしていた
男の手が光ったと思ったらすでに私の魔法弾は全て落とされていた

「少ない……………もつと多く用意は出来ないのか？」

私の魔法弾を打ち落としたであろう男の手には鞭が握られていた

「次は、あんたにも当てるぜ」

「にやはは、すごいね、デバイス無しで私のアクセルシュートを打ち落としちゃうなんて……だったら次は私の全力だよ!!」
レイジングハート!!」

『(Divine Buster)』

「デイベイン……バスター!!」

桜色の閃光が男へと迫った

なのはside end

レインside

「(出たよ……なのはの十八番……どうしようかな
このまま禁鞭きんぺんを使ってもはじくことは出来ないし……
あんまりスーパ―宝具は使いたくないし……
これで抑えられるかな?)」

俺は持っていた禁鞭をしまい、代わりに槍状の宝具を出した

「貫け!!、火尖槍かせんそう」

細いビーム槍の先から発射しそれがデイベインバスターに当たったがやはり威力が足りなかったのか簡単に落とされてしまった

「やっぱり無理があつたか・・・」

しょうがないこんなところで見せるわけには行かなかつたがしょうがない

エンジェルズシステム起動！！タイプα、「ikaros」（イカロス）！！

絶対防御圏「aegis」（イージス）展開」

レインside end

なのは side

直撃はしただろう

非殺傷設定なので死ぬことは無いが気絶ぐらいはしたと思う

「なのは・・・どう思う？」

「うん・・・すごく強い人だったよ。もしも

攻撃が防げていたらもう、打つ手がほとんど残らなくなっちゃう」

ヴィーダちゃんが私の隣に立ち私と一緒に

デイベインバスターで立ち上がった煙のほうを見ていた

「でもよくこれはどうするよ結構壊しちゃったんじゃないのか？」

「にやははは・・・後で謝っておくよ」

「そうだな・・・後で起きたときにでも謝っておきな」

「うん・・・えっ！？・・・」

私とヴィーダちゃんは後ろを振り返ると羽が生えた先ほどの男が立っていた

「ほい、これで四人……」

首に衝撃が走り、私は立っていらなくなり床に倒れこんだ
気絶する直前に男の顔を一瞬だけ見ることが出来た

「（金色の瞳……フェイトちゃんと同じ色だけど……暗
い色してる……）」

なのはside end

レインside

「突入して、何分立った？」

『現在5分経過です』

「機動隊がここに集まるまでの予測時間は？」

これが大切である、これがうまくいかなければこれは失敗におわってしまう

『約3分つてところですね』

「了解」

俺は別に殺しに来ているわけではないあくまで不幸を届けるだけだから罪は全員が知るべきだ。
ここにいるメンバーにもそれぞれ3分ぐらいで起きられるようにしてある

「行くぞ」

『はい、マスター』

このまままっすぐ行けば目的地に着くというところでそれを阻むものが現れた

「ここまでやで」

「八神はやてか」

自分のデバイスを構えた八神はやてが構えていた

「ごめんなー、この先には行かせる訳にはいかないんや」

「・・・すまないな本当にもう時間が無い
ここは能力を使い終わらせてもらっ、太極図^{たいきょくず}」

ものさし棒のようなものの先に丸い玉がついている棒を出しそれを振るうとはやてのデバイスが強制解除された

「なっ!?!?・・・なんで勝手に解けたんや?」

「そういう武器だからだ」

魔法を発動しようにも発動することが出来なくなりなすすべもなく
苦虫をかむかような顔をしたはやての横を歩いて通りぬけようとし
たら

がんっ！と頭に強い衝撃が走った

「ぐわあああああっ！！」

「油断大敵やで、犯罪者さん」

はやての手に握られていたのは分厚い本だった
そのとき俺のフードがパラリと落ちてしまった

「あっ・・・」

「えっ・・・」

はやてと俺は目が合ってしまった俺はあせり始めたが
向こうもきょんとして動けなかったようだ

「……ッ！！すまない」

腰からハーデイスをぬきグリップではやての首筋を殴り昏倒させた

「あんまりしたくないけど、記憶操作で俺のことだけは忘れてもら
わなきゃな」

『しょうがないですね』

そして記憶操作で俺の顔にだけもやが掛かるように記憶を修正した
なんかすげー罪悪感がある

『忘れたといってもマスターの顔にもやが掛かったただですよ』

俺ははやてを部屋の片隅にずらして寝かしておき
問題の少将の部屋に入った

「ひつ、そつ外の魔道士たちは何をしている!？」

「全員、気絶してるぜレムス少将」

さすがは少将、いいシステムデスクじゃねえか
馬鹿みたいに金はかけてるみたいだが……

「なつ、何が目的だ!？私の命か!？」

バーカ、テメエみたいな丸々太った豚やろつの命なんてどうでもいいんだよ

「俺は、お前にとっての不幸を届けに来ただけだ
ちなみに拒否権はない」

「ふつ、不幸だと!？」

おーおーおびえてる
しかも目が移り移りしてる
明らかに何かを隠している
まあそれをこれからはらすんだが……

「ここに、ちよつと厚めの書類の束があります

ここには、お前がこれまでやってきた犯罪の数々が記されている」

「なつ、それは、管理局で閲覧禁止になっている私のトップシークレット!？」

なぜそれがここにある!？・・・あつ」

「そんなのは、ほっておいてよく聞けたとえば

先月、お前の部下が仕事先で事故って大怪我したらしいな
そんでお前にも被害が及びそうになつたら

お前はそいつを切り捨てたらしいじゃねえか。ああ!！」

「しつ・・・知らんそんなことは知らん!！」

書類の束を見せながらドスのきいた声で

相手に話しかけると少将の目の焦点はどんどんずれていった

「じゃあこれはどうだ!!」

これもこれだつていえるのか?」

書類を机の上においていくとどんどん顔が青くかわって行つた

「まだ、否定するか?」

「わかった!!認めてやるさ!!しかしこの会話は私とお前しか聞いていない残念だつたな!!」

「だから言つたろあんたにとっての不幸だと」

俺はポケットから黒い箱状のものを出した

「じつ……これは？……」

「今の会話、全部 流れてるから」

「……ッ！この……外道がああああ！！ああああ
ああああ！！」

ついに錯乱状態になり禁止されている質量兵器の拳銃を取り出た

「はい、更なる追加犯罪を発見」

少将がそれを発砲するよりも早くハーデイスの銃口から放たれた
魔法弾がそれをはじいた

「使い慣れてない武器は使うべきじゃないぜ」

次に頭に非殺傷の魔法弾を打ち込み
気絶させた

『マスター、来ます。だから逃げましょう』

「……ああ」

少将の部屋の後ろにあった窓を開けそこから出て行った

Leinside out

はやてside

目覚めたわたしは急いで少将の部屋に入るとすでに
ブラック・キャットの姿は無かったそして……

「うつ……うつ……げほっ……げほっ……」

気持ち悪くはきそうになってしまった

そこに充満していたのは死臭、死臭、死臭……それしかなかった

「……駄目や……こんなにおいなれとうない……」

ブラック・キャットはこんなこともやるようなやつなんか？……

「……」

さっきの会話が館内に放送されたときには少しは見直してやったのに
これを見たら全部無くなってしまった

「……主……」

「わかつとる、わかつとるよ……」

「帰りましょう……」

シグナムにつれられてその部屋を出て行った
そのときに部屋に書かれている血文字に気づいた

【この後も地獄も続くだろう、覚悟しておけ】

……ゾクリとして気分が更に悪くなった

はやてside end

レインside

次の日

「なっ・・・・・・・・なんじゃこりゃ!!」

あさのニュースを見ていた俺は驚きを隠せなかった
そこにはこんなテロップが流れていた

【レムス少将ブラックキャットと呼ばれる犯罪者により射殺
管理局はブラックキャットをA級犯罪者に認定し搜索を開始】

「そんな・・・そんな馬鹿な、俺は・・・・・・・・俺は殺してない!!」

『はい、マスターきちんと非殺傷で撃ちました』

じゃあなぜ!？、なぜ死んでいる?まさかショック死?

殺すつもりなんて無かったむしろただ罪を認めてほしかっただけなの
に

俺がやっていたことは間違っていたのか?

『まだ、主がやったとは決まったわけではありません
正気を保ってください』

「・・・・・・・・ああ、そうだな・・・・・・・・はあはあ・・・・・・・・
よし、状況把握をしよう

とりあえずもう一回管理局のコンピューターにハックしよう
エンジェルズシステムタイプ発動!! タイプβ「Nymph」
(ニンプ)

ハック開始……………」

パソコンから大量の情報を経て一つの答えにたどり着いた

「俺以外の誰かがやったのか? この文章も俺が書いたものじゃない
し……………」

当分は活動をやめるしかないな……………」

俺は……………」どうなるのかな……………」

泣きたい気持ちになったのに……………」涙はこぼれなかった……………」

レインside end

第二話「俺は間違っているのか？」（後書き）

レ「なんだか俺の性格がどんどん変わってるな」

作「うん、ごめんねなんかへたつぴで」

レ「まあいいよ、慣れてないのはわかってるし
がんばれ」

作「うん、それじゃあ次回は

空港火災にはいりますお楽しみに」

第三話「その意気込みはブラボーだ!!」(前書き)

今回は、いくつは武装錬金の核鉄が出てきます
それではどうぞ

第三話「その意気込みはブラボーだ!!」

レインside

アレから約3週間経ちました。最近はおとなしくしています
暇なので料理を極めています
そんなある日ケータイにメールが来ました
差出人は不明だ

【今夜ミッドチルダ北部臨海第八空港に来るように】

「今日は……なんかあったっけ？」

『私に言われても困ります』

チンッ!!という音で夕食が出来たとわかると一つ思い出したことがあった

「（ああ、今日は火災の日か………おおじて行つときですか）

」

俺はあの格好だとばれるので

あらかじめ渡され部屋の隅においておいたケースの中から
数枚の核鉄かくがねを取り出し、ポケットにしまった
変わりにハーデイスを首からはずし机の上においておいた

『どうしておいていくのですか?』

「お前が居たら反射的に発動しちまうだろ？」

だからはずしておくんだ」

私服に着替え部屋を後にした

ミッドチルダ北部臨海第八空港

「まだおきていないみたいだな、待機でもしますか」

ついたときにはまだ何事も無かったようだった

「嵐の前の静けさってな……まあいきなりなんだから関係ないか……」

弁当をもって屋上のテラスで食べていた

「ふむ、外で食べるのも悪くないな」

食べ終わり空港を見て回っていると

普通じゃ見られないような珍しいものがたくさんあった
しかし思ったのは

空港つてもつと人がいるんじゃないのかな？

あんまり人がいないし

うーん……第八って言うだから居ないだけかな？

再びテラスに戻り飲み物を飲んだあとぼーっとしていた
ついにそれは起こった

ダーン！！という大きな音の後
炎は一気に広がっていた

「大丈夫ですか？」

いつの間にか寝ていたらしい
俺の前には消防団のように服を着ている人たちが居た

「どこも打っていませんか？」

どうやら吹き飛ばされたと思っていたらしい

「はい、大丈夫です」

「よかった。ここは危ないので脱出しましょう」

「えっ……あっはい」

つれてもらって脱出した

失敗した直前に起きようとしていたのに……
しょうがない作戦変更だ

助けてもらって脱出し、病院にいくようにいわれたが俺は無傷だから大丈夫といって

その場を逃げ出して行った。

そして物陰に隠れてソレを取り出した

「行くぜ！！武装錬金！！メタルジャケット防護服の武装錬金
シルバースキン！！」

原作では外部からのあらゆる攻撃を遮断する最強といってもあながち間違っていない装備である。

特徴はデンガロハット風の帽子・長手袋・襟の長いコートにスラッグブーツ

そして手袋とブーツを除く全身が名前のとおり銀色の装備である

「……………ぶ……………ブラボーだ!!」

テンションを上げながら物影から飛び出し、炎が燃え上がる空港に突入した。

そのとき消化作業の手伝いに参加していて、たまたま突入するレインの姿を見たはやては思った。

「アレは……………伊達や酔狂できてんのかな?……………」

「でも……………あの人……………魔力だけで見たらトリプルS以上ありますよ……………」

「人は見かけによらへんのかな?なあリンどう思う?」

「私に聞かないでください……………」

スバルside

「お父さん．．．．おねえちゃん．．．．キャツ!!」

急に起きた火災でおねえちゃんともはぐれてしまった
一人で歩いていたとき爆発に巻き込まれてしまった

「痛いよ．．．．怖いよ．．．．」

ガンっという音と共に崩れて来た石造が私に迫る
もう駄目だ．．．．誰か助けて．．．．
そのとき桜色の帯がその石造にまわりつきとまった

「ハア．．．．ハア．．．．よかった．．．．間に合って．．．．

・

助けに来たよ」

その人はとてもきれいな人でした
そのとき、いきなり切れて崩れてきました。

「えっ!?!?．．．．．なんで」

突然の事態に女の人も戸惑っていました。
崩れ落ちてくる石造、もう本当に駄目だとあきらめたそのとき

「はああああ!!直撃ブラボー拳!!」

私たちの前にいきなり銀色に身を包んだ男が現れ
石造を殴りつけた
しかし石造も硬く、そんなのもびくともせず崩れて来た

「ちっ！！まだ威力が足りないか！！だったら粉碎ブラボラッシュ！！」

はたから見たらただのラッシュだがその一発一発がとてつもなく強力だったのか

石造もヒビが入り始めた

「これで終わりだ！！一撃必殺ブラボー正拳！！」

一発入ったと思ったらその周辺の地面も割れてしまった
そしてこっちに向きなおし私を守るようにバリアを張っていた女の
人に敬礼した

「その少女！！そのがんばりようはブラボーだ！！」

「えっと……………あなたは何者ですか？」

「俺か……………俺の名はブラボー！！キャプテンブラボーだ！！」

男は自分の胸の辺りに手を当てそうだった

「それじゃあ、戻りましょうここは非常に危険なので」

その言葉で私ははっとなった

「おねえちゃんは！？……………」

「はぐれちゃったのかな？」

私は必死に説明しようとするがクチがうまく回らずただただ涙がほおをつたって言った
それを見た男の人はいきなり頭に手を置きぐしゃぐしゃと頭をなでてくれた

「俺が助けてきてやるよ」

「！！・・・駄目です危なすぎる！！」

少女は行かないように言ったが男は片手を上げて歩いていつてしまった

スバルside end

レインside

「大体の場所は把握しているから・・・ここに辺にいるはずなんだが・・・居た！！」

螺旋階段のようになっていいる部屋に出ると二つか三つか下の位置に少女が居た

「その子！！そこから動くな、そこらへんはだいぶもろくなっているからな」

「でも……でも妹が……」

「君の妹はもう助けてある安心しろ！！」

それをきいた少女は泣き始めた

姉妹の絆はとて深いものだと思ったそのとき建物が揺れて階段が崩れ始めた

「まずい！！」

「キャッ！！」

少女がたっていた位置が崩れて少女が落ち始めた
しかしそれは黄色い閃光が走ったと思ったらずでに助けられていた
ので

安心し、その上から落ちてくるコンクリートの束に目を向け
出していたシルバースキンをしまい他の核鉄を出した

「武装錬金！！デスサイズ 処刑鎌の武装錬金！！
バルキリースカート！！」

はいていたズボンが破れそこから四本の可動肢による精密高速機動
が出現した。

各可動肢の先端に一枚ずつブレードが付いている

「斗貴子のセリフを借りると………^{ハラワタ}臓物をブチ撒ける！」

ブレードが高速展開をし全てのコンクリートを破壊した
最後にバランスを保つために四方にブレードを刺し込みバランスを
とった

それを見た二人の少女は何も言えずあんぐりと口をあけていた
そばの安全な場所に下りると再びシルバースキンに戻し二人の前に
立った

「……何かいいたそうな顔をしているが質問は認めないぞ
とにかく今はここを脱出しよう」

「………えっ、あつハイ！わかりました」

とりあえず脱出すると空で誰かが構えていた
その隙に逃げようと思ったのだが……

「………なんだこの状況は？」

「デバイス不法所持に容疑であなたを逮捕します
手伝ってもらって助かりましたけど、これは決まりなので」

フェイトを含めた数人の武装局員に囲まれてしまった

「ブラボーその自分の意思を貫き通す心に
了解した、しっかり応じよう」

自分から逮捕されるように連れて行かれた

時空管理局 取調室

「それで、この武器はなんなのか答えられるか？」

「話す気は無い」

つれていかれてからすでに3時間ずっとこの会話だけをしている
ずっとこの格好、蒸れる気がする

「もう、三時間もこれだけだ、俺が吐く気は無いと判っているんだ
ろ？」

もう帰してくれよ」

「いや、それは出来ない」

そんなに聞きたいのかよ？はつきり言おう

この格好を夏も着ていて何事も無かった本物のブラボーに敬意を称
したくなるぐらい

の気持ちだ

そのとき、俺に3時間も話しかけてきた局員が外へ呼ばれて出て行
った

しばらくしてテレビが持ち込まれた

その映像を見ると三人の老人が座っていた。

「ふむ、三時間の黙秘権を使うとはなかなかの男だな」

「でっ……伝説の……三提督……なぜこのような犯
罪者のみである私に

テレビで会談を？……………」

「ふむ。先ほど送られてきた映像を解析したときに、不思議なものが多くてな。」

そのままほっておくのも問題があるので……………」

私たちの下で働くと共に監視をすることにしたのだ。

だが、安心しろ、すぐにやめさせる気はないが当分たって信用が出来るようになったらやめさせてやろう。

いいかな？レイン・フィレス」

「……………」わかりました」

帽子を深くかぶりなおすと俺は了解した。

ここががんばれば今日のなのは襲った弾丸の正体がわかるかもしれない

俺の後に入ってきたやつ招待がわかるかも知れない

だったら、死に物狂いでもやってやるよ

そのときに別のことに気がついた

「では、今の時間を持ってレイン・フィレスに特例で一等陸尉の階級と共に戦術教導隊への配属を命じる」

「なぜ、戦術教導隊なのですか？

普通にどこの配属でも同じなのでは？」

普通に考えたら一番お膝元の舞台の配属などになるだろう

ああ、もしかして、そういう場所にするか動かしづらいからかな？

そんなことを考えていると大体予測をしたのか

「わかったかい？」

「わかりましたが・・・・・・・・それをやるときの格好は？」

「もちろん、それだが？」

「ノット・・・・・・・・ブラボー・・・・・・・・」

・・・・・・・・出鼻をくじかれた気がする

まあ、応じておいて損はないし、むしろ動きやすいし探りやすい。三提督には悪いが利用させてもらおう。

第三話「その意気込みはブラボーだ!!」(後書き)

作「13あるブラボー技のうち、ひとつだけは封印して
使って生きたいと思います」

レ「おまえ……ブラボー節がよくわかってないだろう」

作「……………いまいち……………」

レ「まあ、次回はがんばれ」

第四話「命の大切さを知れ!!」(前書き)

というわけで、今回も始まります
読んで行って下さい

第四話「命の大切さを知れ!!」

現在家に帰り荷物の整理をしているときにふと思った。
やっぱやらないでアンチ加入にすべきだったのでは？

でもやるって言っちゃまったしなあゝ

出る際に戦術教導隊制服もわたされちまったし……でも教える際は結局シルバースキンなだけどな
はあ……明日も早いし諦めて寝るか

次の日

「今日から配属になりました、レイン・フィレスー等陸士です
どうぞ、よろしくお願いします」

パチパチパチ
拍手が送られる

「それじゃあ、早速付けて上げたいのは山々なんだけど、とりあえず今日は私

の補助ってことでよろしく」

「了解しました」

指導教官陣の全指揮権を持つだろう男の人にそういわれた

「階級は上の人に補助だなんてちよつとなんとも言えない気分だな

あゝ

まあ、よろしくね」

「ブラボー！、階級なんて関係ない、実力がすべてだ」

昨日何度も言い過ぎたせいですでに癖みだいになっている

「……………？まあいいです、行こうか」

「了解しました」

外に出ると十数人の人がきれいに整列していた
こういうのの前に立つと緊張するからいやなんだよな
俺、前世はチキンだったから

「今日から、補助で配属になったレイン・フィレス一等陸士だ
階級など気にしないでいい気軽に呼んでくれ」

それだけを言うと俺は後ろに下がった

「それじゃあ、今日の練習を始めよう
みんなバリアジャケットを展開して、もちろんレイン一等陸士も」

「一等陸士は要らない、普通にレインでかまわない。
そっちのほうの方が楽なんで」

俺はポケットから核鉄を出すと

「武装錬金！！メタルジャケット防護服の武装錬金
シルバースキン！！」

帽子だけはずした武装に着替えなおすと並んでいたのはが目を丸くした

「えっ……その武装……昨日の」

「そう……ブラボーだ！！」

最後に錬金鉄で帽子を生成しかぶると
完全に昨日の火事現場に居た男になった

「どうだ？……驚いたか？」

「にははは……とっても……」

全員武装が終わると俺の姿を見て全員の顔が驚きの表情だった

「俺のことは、今はブラボーと呼べ！！いいな」

そして、俺は見た

訓練学校の訓練の恐ろしさを、もはやいじめといってもいいぐらいの量だな

一通り修練が終わって今日は終わりかな？と思ったとき
教官がこっちにやってきた

「それじゃあ、最後に今日来たばかりのレイン君にちょっとした
お願いがあるんだけど？」

なんだかいやな予感がする

というか確信に近い、教官！いやなぐらいな笑顔しないで！！

「模擬戦してくれるか？」

「拒否したいのだが」

「そこは、ブラボーって言おうよ。レイン君」

並んでいたのはがいきなり横から話しかけてきた
笑顔なのにこんなに怖いなんて聞いてないよ
アリエナイヨ！！

「ブっ………ブラボー！！」

「おう、ありがとな」

ああ、もういいや我慢してやろう

全員武器を構えたときに俺は一ついつとくべきだと思ったことを
みんなに告げた

「これから、俺が使う武器はお前たちにとってはせこい、ずるい
という武器だ。

しかし実践においてそんなものは通用しない。
わかっているな？」

「ハイツ!!」

みんなの意思は強いことを確信したとき、
俺とはまったく覚悟が違うことに気がついた
俺は臆病な男だ

とても・・・とても・・・弱い男だ、だからこそ俺はみんな
にこのことを言おう

俺がブラボーのセリフの中で一番好きなこのセリフを

「みんなに一つ言っておこう。

善でも悪でも最後まで貫き通した信念に偽りなど無い
俺の信念は一人でも多くの人間を救うこと。

そのためならば俺は悪にでもなる

それだけは覚えておいてくれ、行くぞ!!」

「ハイツ!!」

俺はポケットから核鉄を取り出した俺は

「追加武装錬金!!日本刀の武装錬金!!

ソードサムライX!!」

外見は切先が両刃になった小烏造の刀身にSAMURAI Xと銘打
たれている。

そして刀に下緒の飾り輪がついている刀を取り出した

「全員展開!!それぞれのポディションにつき準備しろ!!」

一番中心になっているだろう男性が全員を散らせた
なるほど、攪乱か・・・

一体多数の戦闘ならばではの戦術だ

「シュートだ!!」

5方向からの同時射撃に対して俺は回転しながら全てを刀で受け止めた

「なっ……何でスフィアが途中で拡散した!？」

「ブラボー!、いい着目点だ、普通にこれを見たら消したというだろうけれども拡散するって言うところが

よく魔法を見ている証拠だ、その感覚を大事にするように」

再び全体攻撃で飛んできたスフィアを全て落とし

接近し、一人、また一人と気絶させていく

最終的に残ったのは中央の男となのはだけになった

「残りは、君となのはだけだ、君の名前を聞こうか？」

「はい!!フェンス。フェンス・ディガーノスです」

戦闘中なのに敬礼をした赤い髪の少年

フェンス・ディガーノスと名乗った

「フェンスか……なかなかの実力者と見る」

「どうも、ありがとございます」

フェンスは自分の武器の近代ベルガ式と思われる短剣を構えなおした

「それが君の、デバイスか？」

「ハイ、俺のデバイス、フェンガルです」

それから武器を交えているがフェンスの剣はそれを読んでいるかのごとく完璧によける。

それを繰り返していたがついに終わりが来た

「フェンス君！、準備できたよ」

「よし！！これで、終わりです！！」

なのはが準備が出来たというのは収束魔法だった
迂闊にもそれに気づくことが出来なかった

フェンスがそれを言うと言俺が剣を振り出そうと振り上げたとき
それにあわせて柄に小刀を当てて剣を飛ばした

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

二人が無言になった

「フツ・・・・・・・・俺の負けだ、まだまだ俺も爪が甘いな。はった
りをかまされるなんて」

「あつありがとうございました！！」

「ええ！？私まだ撃ってないんだけど、しかもはったり扱い」

「負けなもんは負けだ、あきらめな」

手を上に上げて降参した

こんなに燃える試合が出来ると思わなかったな。

興奮して思わずブラボー正拳を出してしまうところだった

「どうだった？彼は？」

「とても強いですね。というよりも攻撃が読まれていたような」

仲間達に囲まれて賞賛されているのを見ながら俺と教官は話していた

「そうなんだよ」私の砲撃も全部よけちゃうんだよねえ。いや」
「若いつていいねえ」

「ああ、それはすごいな」

一通り見ていた後、教官が手を一回パンツ！！と鳴らすと全員がこ
つちをふり向いた

「今日はこれで終わり。みんなお疲れ様」

「」「」「お疲れ様でした！！失礼します！！」「」「」

「フェンスは少し残ってくれ。

聞きたいことがある」

「ハイ！」

全員が敬礼をしてその場を去っていく

残ったのは俺とフェンスだけになった

「なんでしょうか？レイン一等陸尉」

「レインでいい、それできみは俺との戦闘の際全ての攻撃を見切っていたのか？」

それとも予測したのか？俺からすれば見切るというよりも予測だ
と思うのだがどうだ？」

ちょうどブラックキャットにあっただな〜5秒先を見ることが出来る
能力

けどあれは、使うと反動が強い。けど、こいつはけろっとしてるから
ちがうのか？

「はい、レインさんの言うとおり俺は攻撃を全部予測しました
それが俺のレアスキル、ウィジョンズアイ予測瞳ツメって自分でつけました」

やっぱりそうか、間違って無くてよかつた

「その力、大切にするんだぞ。
力大きいほど危険かもしれない、けれどそれは使い方だいた。
わかつているな。ところで君は将来は何になりたいのかな？」

「はい！、俺、執行官になりたいんです！！
エースと呼ばれたティード・ランスターさんやフェイト・T・ハ
ウラシオンさんのように
なりたいんです」

ティード・ランスターにフェイト・T・ハウラシオン。その名前を
ここで聞くとは……

予想していなかった。

ティード・ランスターにはあったことはないが、凄腕だったとアニメで言っていたな……

「俺でよければ、少し特訓を付けてやるうか？」

基本的なことしか出来ないが」

「えッ……本当ですか！？おっ……お願いします!!」

それから、俺は訓練の後だから、きつくならない程度にいろいろと教えた。

この武装錬金の知識と出来る限りの魔法の知識で教えられることを教えた

そして、季節は過ぎて春になった

「はぁ……はぁ……はぁ……やった!!やりましたよ
ブラボー!!俺……俺、執務官試験に合格しましたよ!!」

「ブラボー!!お前の気持ちは本当だったと証明できたな
これで俺の教えることはもう無い、お前はもう一人前だ!!」

いつの間にかフェンスは俺のことをブラボーと呼ぶようになった
それが彼から俺への敬意なんだと思えた

「一年間、ありがとうございました!!」

「いや、こっちのほうが強くなったよが多かったよ。ありがとう」

そして彼は執行官になり次々と事件を解決していった

人や上層部は彼を、ティード・ランスターの再臨と称した
しよっちゅう電話をかけてきて事件のことをうれしそうに
話してくれることが俺の誇りであり

同時に楽しみでもあった

けど………そんな日も長くは続かなかった

「はー！？………もう一回言ってくれないか？」

フェリスが執行官になって二年がたったある日、

家で休暇を楽しんでいるところに合鍵を持っていたはやて
息を切らして飛び込んできた

「フェリス君が………麻薬取引の現場を取り押さえよ
うとして逆に囲まれて殺されたって………」

「………何言っただよ？はやて、冗
談は顔だけにしてくれ」

「うそや無い！！今局から連絡がきたんや！！………間違
い」

死んだ？………あいつが？………うそだ………
うそだ！！

雨が降っていた。ザーザーと雨の音だけが響いている墓地と参列者
達。

その中で泣くのはや同僚だったフェイトにはやて

そして彼の家族と思われる男と女。

その中に彼の上司らしき人が居た。

その話に耳を傾けると信じられないことを言っていた

「何が、ティード・ランスターの再臨だ!!、結局はあの役立たずと同じように死んだじゃないか

もう役立たずもいい加減にしてほしいな!!」

そのとき、俺のなかの何かが切れた

気づいたら拳がその上司の顔面にめり込んでいた

「何が……何が役立たずだ!!」

テメエは人の命をなんだと思ってやがる!!

俺からすればテメエのほうが役立たずだな!!」

再び顔面に拳が入り

倒れた上司の上に馬乗りし、また殴る

「レイン君、やめえ!!今は墓前やで!!」

「はなせ!!はやて、俺はこいつをぶんぐらなきやにしなければ
気がすまない!!」

「駄目や!!なのはちゃん!!、フエイトちゃん!!
レイン君をとめるのを手伝つとくれ!」

そして俺は、三人がかりで止められた
止められても息を荒くしている

俺が顔が変形する勢いで殴りつけた上司は立ち上がると俺を指差し

「貴様!!上司に手を出してただで済むと思うなよ!!」

「ほぅそういうか……」

だったら・・・おれはこんな糞みたいな仕事、やめてやる！
」

「なっ！？・・・いきなり何を言っている」

やめるといい始めたらいきなり戸惑いだした上司
そりゃそうだ。ただでさえ人手不足の管理局で
ほぼ居ないに等しいSSSランカーが居無くなるのは
とても避けたい事実だろう

「なっ・・・何言ってるんや？レイン君」

はやてが俺に聞いてくる

その顔は怯えているような顔だった
どうやらさつきから殺気を出しっぱなしだったらしい

「今回のことで理解した。」

この組織はやっぱり腐ってやがる
せつかく局のために命を懸けた男の死を冒瀆するなんて最低だ」

「そ・・・そうやけど・・・でもやめる必要なんて・・・
・・・」

「ごめんなはやて・・・でも・・・もう我慢できないんだ・・・
」

それから俺は管理局に辞表を出した。
もちろん管理局から泣きすがれたが俺はなんとも思わなかった。
うっとうしい・・・それだけだった

まあ、三提督には定期連絡を入れるようにということでは終息した。

俺の身を隠す場所にはやてが彼女達が住んでいた管理外世界の地球を勧めたため

そこに行くことにした。

俺が局を出ようとそこにはなのはやフェイト、はやてが居た

「レイン君・・・・・・・・私の親に連絡しておいたから
降り立つたらいるはずだから・・・・・・・・きつと力になってくれるはずだから」

「何から何までありがとな・・・・・・・・」

なのはから渡された紙をポケットに入れると俺はフェイトの運転する車に乗り

フェイトの義理の兄のクロノのところに行き、
彼に地球まで送ってもらうよう頼んだ。

俺は最初拒否すると思ったが彼は快く了解してくれた。

第97 管理外世界 地球

俺が降り立つとそこには男の人が待っていた
見た目は30代の男性だった

「君がレイン君だね、なのはから連絡は受けているよ。
私は高町士郎、よろしく」

「よろしくお願いします」

とても優しそうな人だった
俺は頭を下げた

「君は組織としては、完全に間違った行動をしているんだぞ」

「はい……わかっています」

「けど……人としては当然の行動だろうな。
私だって同じ状況だったら、きっと同じようにしていたかもしれないな」

この人は俺の心を見透かしたように話しかけてくれている

「大丈夫だ、君にはうちの店でバイトをもらう代わりに
住む場所と、食事は保障しよう」

「すみません……いろいろと」

「いや、お礼はなのはにでも言ってくれ」

どうやら、その後土郎さんに聞いた話だと
なのはが泣きしゃくりながら土郎にお願いしたらしい

「いい仲間を持ったんだね」

「はい、最高の仲間達です」

「おっ！ やつと笑ってくれたよ」

「？」

「だって、レイン君さっきからずっと無表情だよ。
笑わなきゃバイトだって出来やしないよ」

ずっと無表情だったのか……。きつとなのはたちと別れるとき
もずっとそうだったのかもしれない
だとしたら、悪いことをしたな……………

「これからは、私たちを親だと思っててもかまわない
暖かい、家庭で笑って行こうね」

「はい!!」

俺と土郎さんは店に向かって歩き始めた。

俺の約二年間の戦いから離れた新しい生活が始まった

第四話「命の大切さを知れ!!」(後書き)

さて、もう少しで一週間

初めてのアクセス解析を……

えへへどのぐらいかなあ

5千は行つてほしいな

一〇十〇百〇千……万?

えゝ!? 俺の作品が1万オーバーしてる……

というわけで次回はアクセス数一万オーバー座談会を予定しています
それじゃあ

アクセス数一万件オーバー座談会（前書き）

激ぐだぐだだけど読んでください

アクセス数一万件オーバー座談会

作「一万件オーバーだ！！キャッハー！！」

は「イエーイ！！」

レ「なんなんだお前らの無駄なハイテンションは！？」

な「もはやドン引きだね」

作「どうせお前らはリリカルなのはって言うブランドで売れたって言うんでしょ？」

シ「まあ、そうだな」

作「ぐふっ！！心に痛い」

は「まあ、作者は駄目駄目いつとるからな」

一話を投稿したときも曖昧だとかいろいろ言われてたからなあ〜」

作「まあ、あの程度で折れると思ったら間違いだな。

というかこんなに早く一万オーバーするとは思わなかった。

俺からすれば30話め位でオーバーすると思ってたよ。」

な「三十話目は無いでしょ」

フェ「がんばっているならばいいんじゃないのかな？」

は「そやな、いくら作者が駄作発言をしても読んでくれる人には感謝やな」

フェ「あと、コメントにあっただけど、この小説いろいろ変わりすぎなんじゃないんかって」

は「あと、核鉄は確実に質量兵器なんじゃないんかって」

作「あゝ、核鉄は一応、ストレージ扱いで通そうとしているけどバスターバロンとブレイズオブグロリーとかは隠し切れないなシルバースキンはバリアジャケットとでも言っとけばいいし」

レ「じゃあ、どうすんだよ」

作「使わなければ、隠しきれるんじゃないね？」

レ「まあ、二つとも使いづらいのは確かだな」

は「じゃあ、変わりすぎっていうのは？」

作「はつきりいっちゃうとこれからはもうしないようにしますといいたいのだが」

少しつつ、変えて行きたいと思います」

レ「できればすぐに替えるべきだと思うがな」

作「すみません」

作「まあ、そんな話はもうおいておいて、ここで少し追加の設定をしたいと思います」

レ「どんなのを追加するんだ？」

作「まあ、はっきり言えば一つはハーデイスのことかな？」

ハ「私、最近出番がまったく無いんですけど」

作「ハハハっ、気のせいだ。

それで追加設定というのは、ブラックキャットを再び読んで知ったのは

クイックドロウなんですよ〜」

レ「クイックドロウ？」

作「そう、トレインが得意としている早撃ち。

一発で3発から6発まで高速発射できる技。

なんだけどこれは普通のミット式にするとタメがあってできない技だったんだよ。」

は「じゃあ、どないするんや？」

作「そこで、アニメ初期でティアナが使っていたカードリッジをセツトして

弾を発射するやつを利用して、普通の6連式にすることにした」

レ「それ、戦闘の時不便じゃないか？」

作「そこはお前が何とかしろ」

レ「なんて投げやりな!？」

は「駄目やで」この作者一度言い始めたなら何もきかへんからな」

な「がんばってね、レイン君」

レ「馬鹿な！？お前らは俺を見捨てるのか！？」

は「だって、下手にいろいろ言って出番減らされとうないもん」

な「右に同じく」

レ「チクショーーーー！！！」

レイン脱走

は「あつ逃げた!!」

作「全員、追跡!!!」

追跡中

レ「ひっぐ、えっぐ……ぐすんぐすん」

は「だめや、完璧に再起不能や」

な「大丈夫なの？レイン君」

作「そのうち、復活するよ。」

「そんな追加設定のほうかたほう
エンジェルズシステムについてのいろいろを」

エンジェルズシステム α 、 β 、 Δ

今の所出ているのは α と β のみ

それぞれそれらのおとしものから出ている

イカロスとニッフの能力が体にダウンロードされる

しかし能力オンリーだと5割しか発動できない

それ以上の発動すると・・・・・・

は「どうなるんや?」

作「ひ・み・つ」

は「気になるやぁー！ー！ー！はなさんかい！ー！」

作「絶対拒否！！というわけで出てきた技紹介」

絶対防御圏「a e g i s」（イージス）

名前のとおり防御できる限りを全て防御してしまう大技

限界を超えると壊れる

ちなみに壊れるとしたらスターライトブレイカーぐらいの威力が必要である

な「これ、私たちに話しちゃっていいの?」

作「大丈夫だ、これは番外編だから本編の時には覚えていない」

フエ「まあ、いいの?」

作「いいいったらいいんだよ」

な「じゃあ、ほかに話すことは無いの？」

作「特には無い！！」

は「そんじゃ、今日は終わりやな」

作「というか、続きかきたいのでこちら辺で終わりにします」

な「次回からませひ読んでくださいそれじゃあ」

レ「ひつぐ、えつぐ、俺・・・人間不信になりそう

自分の出番のためって・・・ひどいよーーーー！！」

作「ああもうキャラ崩壊しやがって、高町家でがんばって修行してきなあ」

アクセス数一万件オーバー座談会（後書き）

というわけで座談会終了

今回は「高町家での日常」

次回からレイン君は新しい修行と
武器の開発をします

今日中に出来ればします

それじゃあ

第五話「高町家での日々1」(前書き)

それでは今回もぐだぐだでレッツゴー!!

第五話「高町家での日々1」

「シッ！！シッ！！シッ！！ハアッ！！」

朝の高町家の庭で体を動かす一人の青年
腕を高速で動かしまるで目の前に敵がいると思っているかのように
体を動かす

「すごい動きだね」

「あつ、士郎さん。おはようございます。
うるさかったですか？」

窓を開け、顔を出す男、高町士郎
俺が昨日からお世話になっている高町家の主である

「いや、見たことの無い体術だと思ってね。見とれていたんだよ」

「見とれているなんてそんな・・・、まあこれは名前はあるけど
使える人がいないに

拳術なんです。まあ、ほぼ我流みたいなものですけど」

「そうか・・・その拳術の名前は？」

「ガーベルコマンドーです」

「ガーベルコマンドー？そりゃ聞いたこと無いね」

ガーベルコマンドーとは

ブラックチャットに出てくるリバーという男が使う

格闘能力で、拳を徹底的に鍛え上げて銃弾をも跳ね返すほどの威力と

速さを持たせることが拳だけで敵を圧倒することが出来る
今はそれを物にしようとしていた

「まあ、はっきり言えば、朝ごはんだから呼びに来ただけだね」

「あつ……………そうですか、今行きます」

士郎さんからタオルを渡されて汗でぬれた顔を拭いて
家の中に入った。

朝食を食べながら他愛も無い会話をしている中でバイトの話になった

「それじゃあ、今日からバイトに入ってもらうけど
働いてもらうのはお昼の一番混む時間帯だからよろしくね」

「はい、それで、ちょっとお願いがあるんですけど……………」

「ん？……………なんだい私たちに出来ることだったら何でも聞くよ」

「それじゃあ、お言葉に甘えて……………」

俺は説明をした

俺は前線を離脱したとはいえまだ修行をしたいと思っているため
自分の持ち物の中にある核鉄の能力を少し改造して
訓練場を地下に製作しようとしていることなど

「……………それが『向こうの世界』の技術なのか？」

「まあ、そんな感じですね」

「んゝまあいいよ。別にね、バイトをちゃんとしてくれるなら。なあ、母さん」

「ええ、別にいいですよ」

普通にオツケーしてもらえた
バイト・・・そんなに大変なのかな

「いらつしゃいませえゝ」

「新しいバイトの人ですか？」

「はい」

昼になり近くの学生がたくさん集まってくるようになっていた
出ては入る、出ては入るの繰り返しである

「（いい加減、客切れてくれよ）」

「すみませゝん、コーヒーおかわりゝ」

「はい、今すぐお持ちします」

ウェイターの仕事をしていたがこれは確かにつらい
今までよく出来ていたな。すげえタフだよ高町家

「ありがとうございましたゝ」

「とりあえず今日のバイトは終わりだけど、大丈夫？」

「おつかれ」

最後の客が出て行くと俺は地面に倒れてしまった。

そこに桃子さんと土郎さんが出てきて、俺の肩を掴んでくれた

「いや、こんなに大変だとは思いませんでしたよ。」

「はははっ、慣れれば問題ないって」

笑い事じゃねえなこりゃ

しばらく休んでから、修行しよう

「あ、だいぶ楽になったかな」

一時間ぐらいたってやっと行動することが出来るぐらいに体力を回復した

今は庭に出ていた

「そんじゃ、始めますか武装錬金！！、錬金研究所ならぬ、錬金修練場」

今までの錬金研究所の武装錬金を構成しなおし
訓練所に直した

プラス魔力に対応した形になっている。

しかし、地上に出すと無理があるので高町家の地下に作らせてもらった

「それじゃあ、ハーデイス。始めてくれ」

『はい、地形セット、^{リフレクト}反射ショット訓練開始』

周りの殺風景とした部屋に高層ビル群が出現した

「ためしに一発」

適当な角度のところに一発撃つと反射して自分に返ってきた
俺はそれをよけるとまた弾き返ってまたそれをよけるの繰り返し
30回ぐらい繰り返すと消えていった

「………難しいな………リフレクトショット」

『練習、あるのみです』

「おう」

三時間ぐらい繰り返すと夕食に呼ばれ、今日の練習を終了した
夕食をおいしくいただくとそのまま睡眠に入った

そんな感じで半年するとさすがにバイトにもなれて
練習も安定してきた

その間にアリサやすずかにも会い、なのはたちのことを聞かれ
ありのままに話したら二人ともあきれていた

「あいかわらずねえゝなのはは」

「ねえ」

そして問題のリフレクトショットはというと

「おりゃー!」

バンッ!!バンッ!!バンッ!!

『命中です』

「おっしやー!」

同時に3発出来るようになるまで完成させた

いつもフィールドの設定を替え

一万にも及ぶ全パターンに対応できるよう完成させた必殺技になっていた。

威力はそこまで無いけど………

「完成したのかな?」

「士郎さん!、ハイ!」

後ろに立っていた士郎さんがいきなり話しかけてきた

その顔は満面の笑みだった。

まるで子の成長を喜ぶ親の顔そのものだった。

「それじゃあ、練習の終わりに

私と手合わせでもしないか?」

「エッ……戦えるんですか?」

そこらへんの知識が疎かった。

というよりも物語も大半を忘れていた。

最近思い出すことが出来なくなりかけていた。

「ああ、これでも昔はボディーガードをしていたし
今は師範だからな」

「師範？」

「そう小太刀二刀御神流のね」

普通の長さの木刀と小刀を取り出し構えた

「行くよ？」

「拒否権は無いんですね……わかりました行きますよ」

俺もハーデイスをしまいポケットから手袋を取り出し手につけた

何分たっただろうか？

前に居る男はすでに40代後半という高年齢とは思えない気迫と動きで

俺は翻弄されていた

「ホラ、こっちだよ」

「うええ！？ちょっと早くて反応できませんよ」

「フフフツ、私もまだまだ現役で行きたいのでね」

また拳と木刀がぶつかる

すでに限界なのかもしれないと思うほど手がいたい
岩を殴ってもまったく痛くないのに

打ち合ってるだけでこんなにつらいなんて

やっぱり高町家の人々は特殊なんだな

だけど

「負けるのは称に会わないのでこれで決め手見せます」

「何!？」

俺は隙を作り距離をとると構えた

「これが俺のガールコマンドーの大技
音速の拳『ソニックフイスト』!!」

高速で打ち出された拳が士郎さんに当たり士郎さんが吹き飛んだ
と思ったらそこには何も無かった

「えっ!？」

「惜しいね、私じゃなかったらきつと恭介ぐらいしかよけられなか
っただろう技だ。

自身を持つといい」

ポンツというが頭からして後ろを振り向いたら頭の上に木刀が乗せ
てあった

「あゝ!! 負けた!! 負けてしまったゝ!!」

「えゝ……私はお父さんとそれだけやりあえれば十分だと思うけど……」

俺が夕食の席で嘆いていると隣の美由希さんがえゝという目をしていた

「もう少しで私も倒されてしまうところだったよ、さすがに腰がきつかな?」

しばらくこんな会話をしていたと思うと気づくと食べ終わっていた

「うまかったです。ご馳走様でした」

「お粗末さまです」

食器を片付け風呂に入り部屋に戻ると
電話が掛かってきた

「もしもし?」

「おお、レイン君。わたしや」

「はぁ……なんだ、はやてか」

うつうつしいような声で受け答えをする俺

「こんなかわいい女の子から電話が掛かって来たのになんだとは！？」

自分でかわいいとか言うなよ、ドン引き物だぞ

「狸の戯言はほって置いて、今日の分の仕事は終わったのか？」

「なんやてゝ！！わたしの発言が戯言やてゝ！！
今度あつたら覚えておけや！！」

「はいはい。かわいい狸ちゃんゝ、元気そうで何よりだ。で？用事か」

「い、いやゝ、元気そうで何よりや。

たまには電話するのもいいなゝと思ってな」

「と見せかけて、用事なんだろ」

ウツ・・・という声がした後、はやてがしぶしぶ話し始めた

「実はなゝ、そっちの町にあると思うロストログアを一つ回収してもらえるかな？」

「ランクは？」

「設定はBだけど・・・たぶんAぐらいはあると思う」

「・・・管理局にやらせる」

「チョッ！！そうは言わんといて！！というよりも管理局にやって

もらいた

いのは山々なんやけど、動かせる部隊が無いっていうんよ。

でも……Aランクのロストログアをほっとくわけにもいかんし……

ほんまは一般人にやらせるわけには行かないのはわかっておるよ・

わかっておるけど……」

とてつもなくあせっているらしい、

どうしても俺に回収させたいらしい。

Aランクといったら結構難しいぞ。

というか今日は、土郎さんとやりあったから動きたくない

「けど半分封印されてるから安全なはずや。

位置を転送しといたからよろしくな」

「おいこら、拒否す……切りやがった

まあ、明日でいいか」

ぐぐと睡眠に入っていた

まあ、何事も明日になってからスタートしよう

第五話「高町家での日々1」（後書き）

次回もがんばります

誤字脱字、指摘があればよろしく願いします

第一話を大幅修正してみました。

こちらもどうぞ

第六話「高町家での日々2 手に入れる書を」(前書き)

これまたぐだぐだです

そしてまた今回もいろいろ言われそうだけど

タイトルの通り、レイン君の新しい武器と

オリキャラの登場です

第六話「高町家での日々2 手に入れる書を」

レイン side

次の日になり、しょうがなく士郎さんに説明して
休みをもらい、はやての指示した場所へと歩いていくとそこには
いかにも古い神社があつた。

「この境内らしいな・・・行つて見ますか」

500段はあるだろう長い階段を上つていくと
境内にたどり着き一休みをしていると
神主さんらしき人が掃除をしていた

「おや、参拝客とは珍しいですね」

「へえそうなんですか？」

「ええ、こんなところに来る人なんて居ませんよ普通
町外れですから」

俺的には趣があつていいと思う場所なのに・・・
空気はうまいし、まあそれはどこでもだけど・・・

「いや、最近こちら辺で変わったことがあるって聞いたんで暇だし
見に来たんですよ」

「変わったこと……ん〜そうですね〜変な音が聞こえてくる
ぐらいのものですよ

場所もわかってますし……見ますか？」

いきなり言われ、反応に困ったがそのまま応じて見に行くことにした

「へえ……これが……」

寺の大仏殿にあった俺とあまり変わらない大きさの仏像

その手に握っていた棒の先の宝石がたまに変な音を出していた
響く音がなんともいえない魔力を放っていた

「（封印が弱まってるのか……だけどこれは……ここら
辺を守ることが出来る

結界のような役割の物のようなのか……）すみません、案
内してもらって。

もう少し見ていたいで、一人にしてもらえますか？」

ちよつと不自然だったかな？

「ええ、わかりました、ああそうだ。

あなたは考古学に詳しいですか？」

「えっ……あつハイ、それなりに自身はありますけど……」

なぜいきなり考古学？ますます謎だ

「少し見てほしい『本』があるのですが」

「……いいですよ、俺に出来ることなら話を聞きます」

「ありがとうございます。それじゃあ後ほど」

神主さんが去っていくと俺は術式を展開し始めた
ちなみに封印魔法は暇だったときに覚えた。

その他に転移魔法とか結界とかもあったりする

「うーん……でこうなつて……おし!! 終わり」

魔方阵を閉じると ケータイを取り出し

はやてに電話をかけた

ちなみに前は回は話さなかったがこのケータイは特殊で時空間の壁にも
対応してほぼリアルタイムで話せる改造品だ。

相手のは普通のケータイでもかまわない

『もしもし』

「おう、はやて。俺だ」

『おお、レインくん。どや、回収し終わったか?』

初めだけで俺が回収したってわかってやがるのか……

「いや、封印はしなおした。

だけどこれはここの辺の守り神みたいなロストログアだ
いじるわけにはいかなかったからな」

『いじつたらどうなったんや?』

「ん、ここに閉じ込められていた妖怪が

飛び出ていったかも……」

『……………』

自分で言っていて怖くなってきた

よかった……封印しなおして……

『よかったわ、レイン君に頼んで』

「そんじゃ、依頼が終わったから俺は帰らしてもらっぜ。

後、ただの民間人を回収依頼をするなんて間違ってるぞ」

俺は自分の一番確信の部分をはやてに話し始めた

『でも、リンディさんが使える人材は使っとけっていつとったで』

「（アノババア……）じゃあその間違った発想を直しておけ」

これで直ってくれば問題ないんだけどね

「ああ、アルバイト料は後で請求するから。」

『えっ！？……………まあ……………わかった……………』

おとなしくあきらめて払うといったので俺はケータイを切った

そして神主さんのところに行ったら茶菓子と一緒に一冊の本を持ってきた。

「この本なんですけど……うちの三代前の神主が遠方から来た

魔術師と名乗る方に食事を出し、その礼として置いてった物なのですが

読むことが出来ないの……差し上げたいと思います」

「……ちょっと見せてもらってもいいですか？」

「どうぞ」

本をとり中身を確認しようとしたが

封が掛かっていたため、中身の確認することが出来なかった
タイトルは読むことが出来たため読み取ると

『晴天の書』と書かれていた

「へえ、晴天の書」

「読めるのですか!？」

神主は驚き思わず腰を上げてしまった

そのときに、もう年なのか腰に痛みが来てその場に倒れてしまった

「すごいですね、とても歴史的文化財ですよ」

(四十八区ロストログアだけだね……)

「よかったら差し上げましょうか？」

「えっ!?!いいんですか」

「ええ、読める人が持っているほうが本が喜びます」

くれると言っているのだからもらえるものはもらっておこう
それにしても晴天の書。

まるで夜天の書と似たような名前。
なんという偶然いや必然なのか……

「まあ、それも戯言かな？」

俺は神主さんにお礼を言うと

本を脇に抱え早足で現在の我が家へと歩いていった

開くとしたら地下のほうがいいなと思い

錬金訓練所に入り本についていた封をゆっくりと開放した。

開いた瞬間、頭にとてつもない激痛が走りその場に膝をついた。

『マスター？』

「あつ……ガッ！！」

記憶……過去の記憶が頭に走る

戦場の記憶。倒れている人。戦う人。

地獄を見ているような気分になった

誰かの視点なのか、俺は見ているだけなのに人が俺の目の前で倒れ
ていく

「グッ！！……ガッアアアッ！！」

『マスター！！マステ……』

意識が闇に持っていかれた

暗い空間の中で声がする

『すごいです。この苦しみに耐えるなんて……』

すごくなんか無い……ただ頭がおかしいだけだ……

『おかしくなんて無い……あなたは偉大な人です
今まで、わたし達を扱うことが出来たのはこの本の作者だけです』

そうか……俺は、生きているのか？

『ええ、わたし【達】に選ばれて、今は使いすぎた脳を
回復させている状態です』

そうか。だったら……起きたらまた会おう
眠いんだ……眠らせてくれ……

『ええ。マイマスター』

『マスター……マスター……』

再びハーデイスの声がする

下にやわらかい感覚がする

「……あれ？俺確か床にぶつ倒れたはずなんだけど……
ああでもなんか……いいかも……意識もはつきりし
てきて……」

視界もはつきり……

「始めまして、マイ・マスターレイン。

私はこの晴天の書の管理人格です」

俺を見下ろすように顔を見る

金色に青い瞳で俺と同じ年ぐらいのいうとてもきれいな人がいた
あれ？もしかして俺、今膝枕されてるのか？

「名前は？」

聞いてから思ったがたぶん……

「ありませんよ、原書の中身が壊れてしまっていますし
私は管理人格。それだけの存在ですから」

「……そんな事……言うなよ。

今日から俺たちは家族だ。

名前が無いのなら俺がやるだけだ」

はやてがそうしてリインフォースに名前を与えたように……
この世界に来て、ずっと家族がいなかった俺に出来た家族だから……

「晴天の書……ファイター……
ファイターだ！」

「フイアータ？」

フイアータと呼ばれて首をかしげる女性

「ああ、イタリア語で時をあらわす単語だ。
俺の好きな単語でもある」

「その名をもらってもいいのですか？」

何度もいわせんなという顔をしていたらそれを悟ったのか
うなずいた
すると本が開き虹色の光が輝き三人の男女が出てきた

「もしかして……こいつらが……」

俺は身を起こし

顔を合わせると全員がこっちを向いた

「名前は、各自あったのですが……原書のデータは破損して
いたため

騎士達はそれぞれの名前と能力が消滅し

修復はほぼ不可能になってしまったのです……」

その顔はとても悲しそうな顔をしていた

「……もちろん全員に名前と戦ったための力はやる。
俺についてくる意思があるならな」

全員の顔が満面の笑みを浮かべた

改めて全員の顔を見ると

俺よりも多少年齢が高い男性が一人と、少し年下の少女とこれまた年上の女性が一人

男はどこことなく、ナンパ好きに見えたため男を指差し

「ん〜ライとジェノスどっちがいい？」

男はしばらく考えると

「ライがいいです」

「そうか、そんじゃライな。よろしく」

「はいっ！」

（はっきりに言っちゃうとライじゃなくてジェノスを選んでほしかったんだよね・・・

名前の由来が英単語のlieつまりうそだったんだけど・・・
まあ気に入ってくれたんだから、いいか）

残り二人のほうを見ると、わたし達は？という目でこちらを見ている片方はオレンジ色の髪を鎖骨当たりまで伸ばし花の髪飾りをしている年上の女性。

もう片方は薄緑色の髪を後ろでわけて伸ばしている少し年下の女性。

「ん〜、オレンジのほうは・・・ストーリーア・・・略してリアかな？」

意味はイタリア語で物語」

「スッ・・・ストーリーアですか・・・」

「ごめん・・・不満だったかな？」

俺は頭をかきストーリーリアの顔を見ると

ストーリーリアはあわてて手をぶんぶん胸元当たりで振り

「いついえ!!、そんなつもりはありません。むしろ

その・・・なんというか・・・」

顔を赤くして手を振っていると隣のライが

「おいおい、照れちゃって、かわいい。この後どう？」

やっぱこいつナンパ野郎だったか

「おいライ」

「へい？」

「おまえ・・・家族にまでナンパしようとしてないか？」

「ナンパってなんですか？」

ナンパという言葉を知らなかったか・・・

じゃあ無意識で口説いていたんだな

「そんで、そっちは・・・イタリア。

イタリア語で元気を意味する言葉」

「イタリアですか。ありがとうございます!!」

うれしそうに敬礼らしきことをする、名前どおりの
活発な女の子だった。

「三人とも・・・俺と共に戦い、生きるための力がほしいか？」

「『ハイ！！我々はマスターにどこまでも着いて行きます！！』」

「『『』」

それだけ聞くと俺は大きくうなずき

「俺は、お前たちに与えられる限りの最高のデバイスと
戦うための技術を伝えたいと思う、ついて来てくれ」

そして俺は一年間みっちり戦闘技術と戦い方を指導し
ついに物語は s t r i k e r s へと突入する

第六話「高町家での日々2 手に入れる書を」(後書き)

オリキャラについては次のときに

レインの追加設定と共に書きたいと思います

第七話「s t r i k e r s 突入、いざ、ミッドチルダへ」(前書き)

・・・風邪で4日間ダウンしました・・・
とつてもつらかったです

第七話「s t r i k e r s 突入、いざ、ミッドチルダへ」

新暦0075年 ミッドチルダ

「さてやってきました、ミッドチルダです」

「おーい、レイン」。どこに向かって説明しているんだ？」

ライに突っ込みをされてしまった

そんな感じで現在、地上本部に來ています

なぜかって？旧知の友とある人たちに会いに來ました

「これから俺は本部に顔出しに行くから、お前らは三人でそこらへんを散歩でもしてくれ」

「「「はい（へーい）」」」

三人と別れて本部に入っていく受付に向かっていき

「すみません、レジアス中將に連絡取れますか？」

「すみません、お名前は？」

少し考えて

「ブラボーと伝えてください」

「ブラボーさんですね。少々お待ちください」

変な顔をしながら連絡を取っている

受付嬢から眼を背け地上本部の変わらぬ姿を見ていた
えっ。何でよりにもよってレジアス中將を選んだって？

それは俺の知り合いがそいつだからだ。

まあはつきり言うとな俺がまだ一等陸尉だったところに
少し付き合いがあったからだ。

はつきり言うとなアレはあれでいい思い出なのかもしれない……

殴り合いだったんだけどねww。

揉め事してね、殴りあつてそんでもって仲良くなった。

いやいや、おかしいだろという突っ込みもあるだろうけど
熱い拳に想いが宿っちまったのさ

ちなみにその状況を見ていた娘のOさんの証言では

「昔の父さんとゼストさんを見ているような気分でした」
と答えていた。

「ブラボー様、レジアス中將が執務室にてお待ちです」

「そうか、ありがとう」

お礼だけ言つとさっさと歩いて中に入つていった

「レジアスへ入るぞ」

空けた瞬間に拳が飛んできたがなんともなく拳を受け止めて
はじき返した

「オイこら、レジアス。何するんだよ」

「フツ、実力は落ちてないようだな」

「たりめえだ。二年間無駄に過ごしちやいねえよ」

部屋に乗り込むと俺は早速用件を話し始めた

「お前は、まだ戦闘機人に手を出してんのか？」

「ふん、お前に言われる筋合いは無い。

ワシにはワシのやり方がある。黙っててくれ」

そう、これが俺とレジアスが知り合いになった理由でもあり

レジアスの信念でもあることだ。

ちなみにアインヘヤルの製作は必死に話し合い、止めることに成功した。

俺は言った。そんなものに意味は無いと。

レジアスは最初は一等陸尉の戯言だといったが話しているうちに俺の話を聞くようになり、表面上では製作中といっているが実際はまったくしていない。

「それで、局を辞めたお前がなんのようだ？」

「んー、いや、予定に関しては主に三提督に行こうと思った。

けどいくの面倒だから、お前にポートの使用許可もらいに来たんだよ。

あとついでにお前が間違った行動をしていないかの確認と信念を貫き通しているかの確認だよ」

レジアスはそれを聞くと鼻で笑い

もう道は踏み外さんといった。

それだけ聞くと俺は部屋を出ようとしたときにレジアスが思い出し

たように

俺に話しかけてきた

「いい加減、うちのオーリスをもらってくれんか？」

「おまえはいい加減、親馬鹿は卒業しとけ」

といって出て行った

転送ポートを使い本部に来て、そしてついにこの部屋に来た。
どうもこの部屋はなれないんだよなあゝ
ノックをすると中から入れという声が聞こえた

「失礼します」

入るとそこにはレオーネ・フィル法務顧問相談役と
ラルゴ・キール武装隊荣誉元帥そして
ミゼット・クローベル本局統幕議長
という伝説の三提督がそろい組みだった。
こう見ると三人ともただの老人会だよなあゝ

「・・・今、失礼なこと思ったんじゃないか。レイン元特例一等
陸尉」

「お久しぶりです、レオーネ相談役、ラルゴ元帥、ミゼット議長」
深く頭を下げるとミゼット議長が俺に

「それで今日は何のようだい」

「俺の魔道士ランクの再取得と階級の再取得をお願いしたく参上いたしました」

「……ちよつと、元の階級の取得は難しいね。
名前のとおり特殊な階級扱いだったから。
あと監視のためにというのもあったから」

「うん……そうですか……」

さすがに一等陸尉に一発になったから再取得は難しいか……
覚悟はしていたが……

「けど……」

「えっ？」

ミゼット議長の言葉に俺は下げたままの頭を思わず上げた

「一等陸尉は無理だけど……三等陸尉ぐらいは取得させます」

「いいいのですか？……ありがとうございます。」

ラルゴ元帥。ああ、それと……」

その後、俺は向こうの世界で手に入れた
晴天の書について話した。

その中から現れた三人の騎士と管理人格の存在も包み隠さず話した
すると三人は頭を抱えてしまった。

「まさか……あの町はそんな物まであったのか？……」

「はつきり言わせてもらえば、私も驚きでした
こんな、下手したら夜天の書と並ぶようなロストログアが
あの町にあつたなんて……」

しばらく説明をし、最後にミゼット議長が
4人のランクについての話を始めた

「ファイータには階級は無し
残りの三人についてだが、リーダーのストーリーアには
一等陸士、ライとイリアにはそれぞれ二等陸士でいいか」

「はい、ありがとうございます」

「魔道士ランクはどのくらいわから無いから……ちょうどい
い。」

「たまたま試験が試験日だからしてくるがいい。
いいな？」

ラルゴ元帥が話しながら順番を取ってくれたらしい

「ちなみに試験官は……これまたまたまいる
リインフォースツヴァイ曹長にやってもらおう」

「えっ……」

「ちなみに拒否権は無い。すぐに行くように」

「はい……失礼します」

部屋を出ると急いで三人を呼び戻し
試験の準備を始めた

レインside end

ラインside

「わっ!!」

「?・・・どうしたんや?ライン」

私が試験終了の作業を終え、戻ろうとしたら、

私の所に追加の試験教官をするようにという指令がきた

「えっ!?!」

「いや、だからどうしたんや?ライン」

「はっ・・・はやてちゃん。

これ見てください!!」

私がそれを見せるとはやてちゃんは顔を真っ青にした

「何で・・・なんでキール元帥自らの指名なんや!?!
ライン!!」

「わっ・・・私だっただけじゃない！」

いきなり、二時間後にAランク魔道士試験をやるから
その試験官もやってくれって届いたんです!!」

私とはやてちゃんが言い争っている

追加の資料が届いた

「わっ・・・これが今回Aランクを受ける三人の資料ですか・・・

みんな最初からAランクだなんてすごいです!!」

名前の欄にそれぞれ

ストーリーア・フィレス一等陸士

ライ・フィレス二等陸士

イラリア・フィレス二等陸士と書いてあった

ん？フィレス？どこかで聞いたような

「フィレスって・・・レイン君のファミリーネームやん!!なん
で!？」

はやてちゃんが資料を見た瞬間叫び、私も思い出しました
二年前に管理局を辞めた、私やはやてちゃんたちの親友の人です。

「でも・・・ずっと音信不通だったレイン君がいきなり
すこすこな人員をつれて帰ってくるなんて・・・
どうなつとるんや？」

「私にもわかりません・・・」

「・・・まあええ、この子達がどのくらいの実力者か見

てみたいからな」

「はやてちゃん……お仕事は？」

私がそれを言うとはやてちゃんは顔を青くして時計を見ると、更にその顔は青くなり

「リン……」

「はい？」

私の名前を呼んだ後、後ろを向き

「後で撮影した資料見せてな！！約束やで。

そんでもって、なかなかの実力者だったら連れてかえるで！！
いや、レイン君が連れてくるんやからなかなかの実力者にきま
つとる。

他にはわたさへん！！わたしが目をつけたんやからな」

といいながら半泣きで走っていきました。

そういえば、この後会議でしたね

「はやてちゃんの頼みだし、とっておきましょう」

リインside end

ライside

「あゝ、レイン。いきなり連れ戻して何のようだよ」

「・・・いきなりだがお前たちに魔道士ランク取得試験
ランクAを受けてもらう、異論は許さん」

ええゝマジかよゝなんでめんどくさいことを・・・

「かわいい試験官にあえるぞ、ライ」

「マジで！？キャッホーガフツ！！」

「黙れ、ライ」

俺がレインの言葉で飛んだらそこに
ストーリーに鳩尾を殴られたためその場に倒れこむ俺

「いつ・・・いきなり何やるんだよ！？リア！！」

半泣きで俺はストーリーアをにらむと
ストーリーアは

「そんなことを言うから駄目なんですよ。ライは」

「そうだよ、もうちょつと考えなよ」

ストーリーアだけでなくイラリアにも突っ込まれてしまった
俺、ショック！！劇的ショック。

「ホラホラ、ライのことあんまりいじめんな、あと1時間で集合だから行くぞ」

レインにそういわれたため

よろよると立ち上がり

廃棄場市街のほうへと歩いていった

めんどくせえけど、がんばっちゃいますか

L i s i d e e n d

第七話「s t r i k e r s 突入、いざ、ミッドチルダへ」(後書き)

新キャラについては次回投稿します

誤字脱字などがありましたら言ってください

ちなみになぜキャラが全員レインの性を名乗っているかについての
突っ込みは無しでお願いします

第八話「試験」

レイン side

全員がスタート地点に着くと俺はそこからだいぶ離れたい地に移動していた

「さうて、お前らの一年間の修行の成果を見せてもらおうか」

ゴール地点につくとそのそばのビルの上に座り込んだ
あくびをしていると誰かがこっちのほうへやってきているのが見えた

「ああ！！やっぱり」

どこか聞き覚えのある声の方向を見るとそこには

「よお、レイン。久しぶりだな」

「レイン君！！、何で今まで音信不通だったんですか。
はやてちゃんがなのはちゃんの実家に電話しても
いないって言っていましたよ」

相変わらず喋るな

「ああ、地球での面倒な仕事をはやてが押し付けてくると思ってな。
士郎さんに頼んでこないようにしてもらったんだ」

「ぶー！！、ひどいです。みんな心配していたのに」

「はははっ、悪かったよ。リン」

たわいも無い会話をしていたときに一気にそれは始まった

「おっ、スタート。がんばれようみんな」

「相変わらずの他人行儀なんですね」

はあとため息を疲れてしまいました

レイン side end

ライ side

「そんじゃ、行きますか」

「何を仕切っているんですか？ライ」

走りながら俺とリアは話していた

「・・・来た、前に10体」

それに比べベイリアは戦闘になると必要なこと意外は話さなくなる
えらいねえ俺は喋ってないと集中できないのに

「それでは、フロントはライ。よろしくね」

「おうよ！まっかせなさい」

ガジェットたちが魔法弾を出してくるが俺の武器のトンファアがそれを全て叩き落し、ガジェットも全て落とした

「その荒っぽい戦闘方法なんかできないの？」

俺のデバイス、名前はケルベロスというアームドデバイス何でそんな名前なのかはわからないがトンファアそしてもうひとつは禁止されているため使用はしていない。

ちなみに残りの二人のデバイスのうち、ストーリーアのはアークスというサーベル型のアームドデバイス。

イラリアのはアルテミスというアームドデバイス。遠距離に強いようにしたいらしい。

まあ武器を分けて双剣にも出来る品物だ。

アームドデバイスなのは全員がベルカ時代の本からだったのでそのように

ハーデイスのセカンドモードのデータを分解し、作ってくれた。それともう一度いうと全員が2ndモードは封じられている。

バリアジャケットはなぜかレインの好みでスーツということになった

「いくぜえ、ロード！！」

一発約款が飛び出し片方のトンファアに炎の魔力がこもる

「必殺、アカシック……」

そのまま大きく振りかぶり

「バスター！！」

放たれた青色の炎の砲撃？が直線状にいた敵を吹き飛ばした

「やりすぎだ！、そこまでやる意味は無い」

「いいじゃねえか、ど派手に行こうぜ」

ケルベロスを構え直し、抜けた弾のところに一発こめる

「この先の通路に……AMFを張ったのが20体
うち、三体は大型……」

「今度はお前が頼むぜ」

「イラ、頼むぞ」

「うん。アル、ロード」

今度は逆にライが少し下がり、イラリアのデバイスから
約款が一発打ち出される。

それと同時に後ろに二十ほどのスフィアが現れ、イラリアの構えた
矢にその魔法弾が吸収されていた

「クラスタースフィア……ロード」

もう一発約款が発射される。

集まった大きなスフィアが更に巨大化する

「シュート」

放たれた矢は通路を通り過ぎていったと思ったら

はせて、その周辺の敵を全て破壊した

「わッ！？なんですかあの魔法」

「ああ、クラスタースフィアか。

あんなデイバインバスター並みに威力がある魔法を通路で使うな
って言ってるのによ……

デコイあるのわかってるのか？」

はあとため息をつく

「………一体何を教えたんですか？」

「ん？そりや、戦うための方法をそりやいろいろと……

一応全員、あの手の威力の魔法を一つは持ってるぞ」

「(………なんか………もしかしてなのはちゃんよりも別の意味で

スパルタで鍛えたのでは？)」

「おいこら、リイン。変な解釈してないか？

別に俺は教えるつもりは無かったのに、あいつらがほしいうて言
ったんだぜ」

まあ、どちらにしても教えたあなたが悪いですよ。

いつの間にか放ってあったサーチャーで確認している

レインを横目にそう考えたリインであつた

「さうて、いつのまにか。最終関門に着いたぜ」

「アレが、最終関門……」

「数多すぎるだろ……大型が二十体いるぜ。
本当にAランクでこれかよ……」

「また使う?……」

岩陰に隠れてこの後の計画を考えているとき
イラリアが普通に怖いことを言い始めた。
さつきそのせいで建物が崩れそうになって危なかったのにまだ言つ
てるよ……

「いいです。私が準備しますからライとイラは意識を
そむかせておいてください」

「了解」「りょくかい」

物陰からまずライがでてまわしているトンファアで全ての魔法を落
としていき

イラリアがスフィアで各自に数を減らす
そして……

「行きますよアークス。トリプルロード」

アークスの柄から3発約款が飛び出し
物陰を出て大型の砲撃を寸前でよけながら進んでいく
敵の大群に向かっていく

「アレじゃあ危険行為です!!」

「いや……大丈夫だ。あいつの本業は周りが
作った隙に確実に敵を破壊することにある。
……アイツはセンターとフロントの両立型だからな」

「あれ？センターって援護射撃が主じゃないですか
それじゃあ、違いますよ」

私がそれを言うとレイン君は鼻で笑い
やれやれという風に手を上げた。
なんかム力つきます

「さっきから時折やっているだろ。
アイツの武器はベルカ式。だからスフィア製作が苦手なんだよ。
しょうがないから主に指揮官がアイツで
残りはイラリアに押し付けてるのさ」

ああ、だから遠距離攻撃のときは頼んでいるんですね。納得です。
そしてもう一回見ると……

「イラ、ライ！！その場を離脱しろ。巻き込まれるぞ！！」

前で魔法弾をはじめていたライと援護射撃をしていたイラはそれを見るとその場を離れた

「これで決着をつけてやる。見切れるものなら見切ってみろ！！
覇者一閃！！」

その一閃は一閃にあらず、ぶつかったときに数千の傷をつけて二十体の大型を破壊した

「わゝすごいです」

「だろゝ俺の自慢の弟子だ」

時間を多量残してゴールした三人を遠くのビルから確認する

「これなら、問題無しです。

三人とも技術も十分ですし、ちょっとした危険行為には目をつぶり
ましょう。

コンビネーションも十分です」

「そう言ってもらえるとうれしいねゝ育てたかいがある」

「でも、最終決定するのは他の人たちなのでなんともいえませんが」

たぶん大丈夫だと思います」

次の日、結果が来たのでリインのところに行くところには

「ひさしぶりやなあ、レインくん」

「なんだ、狸。一年間連絡を取らなかったことがそんなに不満だったか？」

あつたら早速、青筋を立てて仁王立ちをしているはやてがいた

「そうやねえ、それもあるけど、こんなに強い人員をつれてくるならあらかじめ言っただけだった」

「サプライズだー!!」

「何で!?!」

ふっ、と息をつくと手を上げてそれを口元に二本指を構え

「そのほうが面白かったからからだ!!」

「はぁ・・・期待したわたしが馬鹿やった・・・・・・・・」

しばらくこんな調子で話していたが

どうもはやてが何かを聞こうとしていたのを悟った俺は話を切り出した

「そういえば、リンから聞いたんだが・・・・・・・・」

4日後に新部隊発足なんだってな」

「そうなんよ!! やつとわたしの夢がかなう。

4年間そのためにがんばってきたんや」

話し始めははやての口は回る回るどんどん回る
これまでの苦労やメンバーの話を休み無く話す

「そんでな、レイン君」

「何だ? 狸」

「まあええ、わたしを狸と呼んだのはスルーしてやるわ。
うちに入っとくれ」

「拒否」

「そういうと思って根回しさせてもらっというたわ
4日後に移転するように」

「チッ!! 用意周到な狸だな」

「もう今のテンションだとそれがほめことばでもええでえ」

これ以上やってももう無理があるため
あきらめて応じることにした

「所属はどうするんだ？」

「そつやなあ。分かれさせるか……レインくん。
自前の分隊つくらへん？」

分隊か……。それもいいけど……。いややっぱり……

「持つのめんどくさいからこつちから指名させてもらっぜ。

ライとストーリーリアは組ませてスターズにイラリアはライトニング」

「レイン君は？」

「俺は階級が無いから拒否しよう」

これでだませるか

「いま、だませる自信あったんか？」

だとしたら失敗やな、きちんと調べさせてもらったで。

レイン・フィレス三等陸尉」

「（チツ）……よく調べたな。えらいぞ」はやて」

頭をなでてやると手をはたいてきやがった

「おもくそ、いやな顔した跡に頭なでもらってもうれしくは無いわ!!」

しょうがないから、レイン君は……うちにしょうか？
ロングアーチで、ラインと一緒に前線指導。
確かもつとつたよな。指導権」

「んゝ、前にとつたけど、やめちまったから無効だろ。
持ち手にあるのは武装許可証だけだ」

……困った顔をしたはやてを見ていたらいじりたくなつたので

両頬をつねって伸ばして遊んでいたら手をばたばたさせていた

「なんや!!わたしに恨みでもあるんか!?
人の頬をつねってそんなにたのしいんか？」

「おう」

「即答かい!!」

どこからか取り出したハリセンで叩かれた。
さすが関西人。いつでもハリセンは常備か

「そういえばレイン君。
うちに来るにあたってリミッターをかけてももらうんやけど……」

「ああ、さすがに管理局唯一のトリプルSオーバーなんadena。
かけてもらうのは自分で3つ
あとレジアス中将が一つでダブルAで決定した」

はやてがそれを聞いたときに目を丸くして
俺に掴みかかってきた

「何でレジアス中將が出てくるんや。

相変わらずレイン君と人のつながりがわからへん……
しかも……レジアス中將は六課批判派やで……
そんな人にリミッターかけられたら……はずせへんとちゃ
うの？」

あえてここでだましてみるか……

「まあ、向こうの取り決めだし……こっちは何もいえないんだ
よ。

そんじゃ、当日。またあおうぜ」

そして六課終結の日になった

第八話「試験」(後書き)

次回はレインと家族の紹介です

再び設定へん（前書き）

つか設定ってやつです

レインのほかに騎士メンバーの情報もあります

再び設定へん

レイン・フィレス（元・雨宮 樹）

19歳

遺失物対策部隊 機動六課 ロングアーチ分隊所属

三等陸尉 前線指揮補助

魔力量SSS+ 魔道士ランク 陸戦SS 空戦AAA

魔力光 ハーデイス時のみダークブラウン

デバイス

ハーデイス トレインと同じ十三の傷が入った銃

レインのことを慕ってるんだか慕ってないのか
よくわからないインテリジェントデバイス
一通りのミッド式魔法と自己流魔法を使う

晴天の書 地球 鳴海市で発見した本型デバイス

ほとんどのデータが壊れていたが修復作業によって
多少修復に成功した

バリアジャケットはトレインの普段着に前の丸いのがついていない
のに

はやての騎士甲冑のジャケット

そのほかに宝具と核鉄は非殺傷設定が可能になっている
バオベエ かくがね

また宝具の一部は形を変えている

なぜなら形があまり好きではないからだ

具体的にいうと金蛟剪きんこうせんと雷公鞭らいこうべんの二つは

形が気に入らないため金蛟剪ははさみ型から銃に替え

雷公鞭は短い鞭に変えた

その他はほぼ漫画『封神演義』と同じになっている

核鉄はほとんど形を変えずに使用している。

そちらのほうが都合がいいからである

CVはBLACK CATのトレインと同じ近藤 隆です

ファイター・フィレス

年齢不定 見た目20歳

ベルカ式デバイス 『晴天の書』 管理主人格

魔力量AAプラス

魔力光 サンライトイエロー（えっ、武藤カズキと同じ？……
気にすんな）

デバイス 『晴天の書』

修理中のため、騎士システムとユニゾン以外は出来ない

サイズは手帳サイズから本サイズまで自由自在

レインには常に持ち歩くようにといっているらしい

長い金髪に青い目の女性
身長はレインとそう変わらない
体系はシグナム並み

CV 喜多村英梨（Angel Beats!のユイ）

ストーリーア・フィレス

年齢不定 見た目20歳ぐらい

遺失物対策部隊 機動六課 スターズ所属

階級 一等陸士（特例）

魔力量 AAプラス

魔力光 薄紫

デバイス アームドデバイス 『アークス』
黒を貴重としたカッタラス型のアームドデバイス

オレンジ色の髪をまとめず伸ばし、ストレート
アクセントに花の髪飾りがついている
身長はレインよりちよつと低い
スタイルはフェイトと同じぐらい

CVは沢城 みゆき（Angel Beats!の岩沢）

ライ・フィレス

年齢不定 見た目二十歳

機動六課 スターズ所属

階級 二等陸士（特例）

魔力量 AAプラス

魔力光 スバルよりも薄い青

デバイス アームドデバイス『ケルベロス』

基本は銀を貴重としているが殴る部分だけ黒となっている

黒い髪でお茶らけた雰囲気

元にしたキャラはブラックキャットのジェノス

身長は185ぐらい

CVは木村良平（Angel Beats!の日向秀樹）

イラリア・フィレス

年齢不定 見た目15歳

遺失物対策部隊 機動六課 ライトニング所属

階級 二等陸尉（特例）

魔力量 AAプラス

魔力光 緑

緑色の髪を分けて伸ばしている

膝下まである

体系はティアナよりもちよつと無いぐらい

身長は150強

デバイス アームドデバイス 『アルテミス』

形はアーチエリー型のアームドデバイス

弦は魔力で張っており、切って二つに分けて接近戦活動も出来る

CV 花澤香菜（Angel Beats!の立華 かなでなど）

レ「見事に全員、AB!のキャラだな」

作「仕方が無いだろ。好きなんだよ。」

それにライのCVは緑川さんにしようと思ったのに……

よくよく考えたら恭介がそうだったから……

同じおちゃらけキャラの日向の声優さんに……」

ラ「今日の俺と、明日の俺が同じだと思ふなよ?」

レ「ホレ見ろ、ライのやつが調子に乗りやがった」

フ「やっぱり、バカですね」

イ「増えちゃった」

ス「まったく、この作品ただでさえ、批判意見が多いのにこんな調子で大丈夫なのですか？」

作「大丈夫だ、問題ない・・・キリッ」

ス「いや、キリッとしても対して変化ありませんよ」

第9話「機動六課」

075年 4月 遺失物対策部隊 機動六課隊舎

「おおすげえ、真新しい建物。いいねえ、女の子のおいがする」

俺が運転する車に乗って機動六課についたときに
ライがすでに女の子のおいがするとかほざいていた

「まさかこんなことになるとは思わなかったな」

「俺がいたいよ……」

届いた服に全員が着替えてある状態で入り
三人はロビーへ、俺は部隊長室へと赴いた
意外とすぐに見つかり入ろうとすると中から声がするので少し止ま
った

「（高町なのは一等空尉）」

「（フェイト・テストロッサ・ハラウン執務官）」

「（両名とも機動六課へ出講となります）」

「（どうぞよろしくお願いします）」

おし、入るかと思ったら誰かに背中を叩かれた

「どちら様ですか？」

「・・・・・・・・なんだ、グリフィスか。久しぶりだな」

「・・・・・・・・フィレス元一等陸尉？・・・・・・・・おっ、お久しぶりです！
」

「今は三等陸尉だ。まあ中に入ろう」

「はい」

ドアを開けるとそこには三人の美女と一人の妖精がたっていた
二人は大きく瞳を開けて、こっちに指を挿してきた

「フィ・・・・・・・・フィレス君？・・・・・・・・」

「何で？・・・・・・・・管理局を辞めたんじゃないの？・・・・・・・・
」

思ったとおりの反応に感謝感謝

でもはやてはどちらかというところと来たかという顔でこっちを見
ていた

チッ、ばれないように回ろうと思ったのに

キール元帥のせいでこうなっちまった

「今日付けでこちらに配属となりましたレイン・フィレス三等陸尉
です。」

以後ともよろしく願います」

「「ええっ！！」」

「グリフィス……俺……こんなに驚かれると思わなかったんだけど……」

しょうがないですよといい、はやてに全員集合したと知らせて全員でロビーに移動した

ロビーに移動したときに俺の顔を見た、顔なじみたちは全員目を丸くしたため驚いた。

「起動六課課長、そしてこの本部隊舎の総部隊長を務めます八神はやてです」

拍手が上がる。

対して長い話をせずに演説は終わった

「おい、レイン！！何でここにいるんだよ！！」

演説が終わるとまっさきにヴィータが話しかけてきた
その後ろにはシグナムやシャルもやってきた

「そりゃ、ここに勤めるんだから当たり前だろ。
居ちや悪いのか？」

三人とも目を丸くした後
ライ達が俺のところに来てきた

「レイン！この後はどうすんだ？」

「……フォワード陣と話したか？」

「ハイ、能力などをいろいろと」

それだけ言つと、外に行くように指示した

「あいつらは？……」

「俺の家族だ。フォワード陣に別れて参加する。
まあ、しごいてやろうぜ」

「お前も教えんのかよ」

「もちろん」

ええ〜という顔で見えてきやがった

おいこらヴィータ俺に恨みでもあんのか？

「お前が教えるのか……創造できねえ……」

「ひでえ！！仮にも元戦術教導隊だぞ！！」

「ええっ！？」

「いまさらかい！！」

あまりにも驚きだったのでまさか今まで知らなかったのか
何度も言っていたと思ったのに……

というわけでやってきました
練習場。さすがは新設設備

「全員、集合したね」

「「「はい!!」「」」」

フォワード陣7人と一匹

俺がついたときにはすでに話が終わりのほうになっていた

「ちいゝす」

片手を上げて挨拶をするとなのはは腰に手を当てて

「もう、レイン君。新人の前でそれは駄目でしょ!」

「わりいな。俺はいつもこんな感じなんだよ」

そう言ってフォワード陣の前に立つと一人が手を上げた

「何だ? ティアナ・ランスター一等陸士」

「はい、質問なんですけど

レインさんって、レイン・フィレス一等陸尉ですか?」

「おう、今は三等陸尉だ、

まあ、指導もしていくだろうからよろしくな」

「はい！！管理局の鉄槌と呼ばれたレインさんに指導してもらえるなんて、うれしいです！」

「……………何、今の管理局の鉄槌って……………
もしかして、アレか！？管理局の白い悪魔とか
閃光とかと同じ扱い！！
しかも鉄槌って……………」

「なのは……………俺そんな風に言われてたの？」

「うん、知らなかったの？」

「アノ服で相手を捕まえてたからついた通り名らしいよ」

「マジでえゝいやだわゝそんな名前……………
早いこと返上しないと……………」

「まあ、もう。当分アレは使わないだろうからいいけど……………
今日は見るだけだ」

「えっ、そうなの？」

「初日から俺にやらせるつもりだったのかよ……………鬼だな……………
いや、悪魔かm「レイン君……………怪我したくなかったら言わ
ないほうがいいよ」

「馬鹿な！！ばれただと……………」

「それで、今日は見に来ただけ？」

「ああ、いや、リアたちに強制をかけに来ただけかな？」

ポケットから三本のミサンガを取り出し、三人に渡した

「げえゝまたこれ付けろと?・・・」

「ああ、簡易リミッターだ。」

まあワンランク下げるもんだからいいだろ」

ちえゝといいながら三人はリミッターをはめる

「それじゃあ、最初だから軽く8体にしようか」

「動作制度C攻撃制度Dって所ですね」

「うん」

なのはがそういうとシャーリーがコンソールを
いじり、新人達の前に8体のガジェットを出した

「これが今回、私たちがたたかうことになる
自立行動型魔動機」

「それでは」

「ミッション」

二人の声が重なる

「「スタート!!」」

「あゝ、ライ、リア、イラに告ぐ。
開始10分まで攻撃禁止で」

「えっ！？なんで」

「んゝ、俺、元からAMF対策訓練やってるから
たぶん簡単に破壊できちまからだ」

二人とも予測していたらしいという言葉に驚く二人。
だって、9ヶ月当たりからやることなくなっちゃって……
いつそのことやろつか？といったらやるといったので教えた

「やっぱり苦戦してますね」

「うん。AMFがあるから大変だもん」

10分が経過したことを確認すると俺は一発銃を放った

「おっシャ、来たぜ合図が!!」

追い込むように移動していただけた三人が攻撃に入ろうとしたが
先に、みんなが5体破壊してしまったため、三対だけになった
一番先に動いたのはイラリアだった

「無効化フィールドを張って……敵を撃つ」

矢が放たれると、何事も無くAMFを貫き、ガジェットを破壊した

「負けらんねえ」

魔力をこめたトンファーで何事も無く破壊するライカットラスで貫きストーリーア

「まだ、荒削りだね」

「まあ、最初からお前にやらせるつもりだったから
初歩と多少の拷問ぐらいだ」

「拷問って……」

口笛を吹いてその場をはぐらかした

「はい、それじゃあ、今日の訓練は終わり」

三時間ぐらいはたっただろう

初日の訓練が終わり、へろへろな新人4人とだいぶ疲れているがまだ大丈夫な

俺の騎士の三人。

「初日には、がんばったほうだな。

ゆっくり休むように」

みんなが部屋に戻る前にシャーリーに許可を取り
俺はその場に残った

「さあゝて、自分を鍛えるか

反応制度A A攻撃制度はDぐらい」

設定で先ほどまで新人達が練習していた訓練場
旧市街を選択、ガジェットを軽く50体

「ハーデイス、セットアップ」

セットアップし、白いシャツに青いジャケットそして黒い装飾銃
目の前には逃げ出す、50機のガジェット

「小手調べ、クロスファイアー……」

銃に魔力を収束させる

「シュート」

同時に3発のクロスファイアーシュートで10機ほどのガジェットが
破壊された

抜けた部分に新たな約款をつめていく

「逃げた敵は……」

極限まで精神統一をすると機械が風を切る音が聞こえ
指でまわしていた銃を構え

「リフレクトショット」

6発の弾を適当に放っていると見せかけて全て狙って放つ。何度も壁に反射した玉が的をどんどん射抜き、弾を追加し更に放つ

「残り、5機」

後ろを取った一機がスフィアを放つが銃で軽く受け止めまた打ち込む

三十分もしないうちに練習は終わり

うつすらかいた汗を洗うためにシャワールームに向かっていった

遅めの夕食をとり食堂に行くとシグナムたち副隊長陣が食事を取っていた

「ちゝす」

「レインか。お前も夕食を取りにか？」

「ああ、新人達が行った後に少し、体動かして、シャワー浴びてたらこんな時間になっちまった。隣いいか？」

「ああ、いいぜ」

持っていたトレーを机に置きヴィータの隣に座った

「なあレイン」

「ん？なんだヴィータ。俺の顔になんかついてるか？」

「いや、お前の育てたやつら。」

すでに結構出来てたからな、お前がどんな修行をさせていたかを聞こうと思つて」

今日の訓練のときに、地面でへばつてなかったからかな？

「そりゃ、そうだ。普通、訓練校で2年かけてやる量を半年に圧縮したし、

その他に俺と士郎さんで拷問のごとく育てたんだ。
育つた無かつたら、困る」

全員うわあという顔してやがる、まあ当たり前か……
思い出すだけで生まれたばっかのあいつらの泣き顔が思い出せちゃう……

それにまさかの三ヶ月目でライが反抗期迎えちまつて
更正するのも一苦労だった……
二人が迎えなかったのは幸いだけど
考えていたら後ろから足音が聞こえた

「おつ、はやて」

はやてだった

シグナムたちもたつて迎える中、俺は一人飯を食べていた。
シグナムたちがはやての分のトレーを持ってきて
机をもうひとつないではやてがそこに座った。

「中央のほうはどうでしたか？」

だいぶ食事が進んだところでシグナムが質問した

「新設部隊とはいえ後ろ盾がしっかりしてるからな。

そんなに問題ないよ」

「後景人だけでもリンディ提督にレティ提督
それにクロノ君・・・いや、クロノ・ハラウン提督」

「そして、最大の後ろ盾は聖王教会と教会騎士カリム」

（まあ、あと三提督もだけどな）

わからないように支援してもらうことにした
まあしょっちゅう使用されちまうからいいけど

「レイン君はどう？」

「ああ、まあいいんじゃないね。

仕事があんまり多くなければ最高なんだがな・・・。ああ後、は
やて」

「ん？なんや？」

「俺の部屋が無いのはなぜだ？」

完全になつこりとした顔でこっちを見てきた。

いや笑顔じゃなくて、どこと無くどや顔ッぱい。いやどや顔だわ。

「いやなあ、当初の用意分の部屋割りだと一部屋しか開いてなくて
しかもそこが一人部屋やったんや」

プククツと口を押さえるはやて
あれか。俺に床で寝ろというのか

「けど、安心してええで。別の部屋を用意しといたで」

「マジでっ!!」

いやあゝよかつたゝ床で寝なくちゃいけないかと思つてあせつたぜえゝ

「女子寮の管理人室だけがあいとつたんやゝ、いやあ男性寮と違つて寮母さんがいればいいとおもつとつたんやけど、やつぱいなきやあかん見たいなんや。

というわけで荷物もつてつといて」

・・・えつ、いやいやおかしいだろ

何で男の俺が女子の管理人にならなくちゃいけないんだよ。

しかも普通、ある程度空きがあるようにするだろう

なのに無いとか、あくまで男が少ないのをいいことにそんなことを・・・

いやだけどやつぱおかしいだろ!!、殺されるだろ!!女性陣にも男性陣にも。

前を見ると笑いこけているはやてがいたので、頭にデコピンをかました

ペチンっ!!では無く、バキッ!!という音がした

「いった!!、ちよつ、レイン君。ただでさえ銃ばつか握つてて指の力も強いのに

デコピンされたら、頭蓋骨陥没してまうで!!」

「してしまえ!!お前の頭蓋骨など陥没すればいいのだ!!むしろしろ!!ここですろ!!」

席を立ちファइटینگポーズをとる俺とはやて
シャマルはどう入ればいいのかわからずおろおろしている
そのとき俺の頭にとてつもない衝撃が走った

「その辺にしておけ」

シグナムに拳骨を落とされてしまった
涙ぐむ俺はしょうがなくあきらめて、残りの食事を食べきった

「しくしく……何が悲しくて女性寮の管理人になったんだよ……」

「ご主人様……いつまでも体操すわりしてないでください……」

荷物を持ち込みベットの上で体操座りをする
俺とその隣で俺をなだめている金髪に青い目の女性
ファイアータ。

「うう、今の味方はきっとお前たちだけの気がする……」

「わたしは常にご主人様の見方ですよ。」

まあ、もう今日は遅いですし、あきらめて寝ましょう」

「そつだな」

布団をかぶるとそのまま寝てしまった。

ちなみにフィーターも布団に入ってきたがもはやいつものことなので特に気にせず寝た。

「ああ、明日起きたら・・・・・・・・俺・・・・・・・・男女両方から殺されそうだな・・・・・・・・」

第9話「機動六課」（後書き）

誤字脱字などがございましたらコメントでお願いします

お知らせ（前書き）

お知らせです。

ここまで読んでくださった皆様スミマセン・・・・・・

お知らせ

ここでこの小説、魔法少女リリカルなのはs t r i k e r s 転生者
黒猫の物語

のことでお知らせがあります

この小説の更新をやめて、一から書き直すほうがいいのでは？
という意見をもらい、一度この魔法少女リリカルなのはs t r i k
e r s 転生者黒猫の物語を

ここで完結させて、再び新しい作品を書こうと思います。

ここまで読んで下さった皆様

まことに申し訳ありません

基本設定から書き直します。

だけど、元の設定をなるべく崩さず、また完全に新しい作品を書こ
うと思います。

出来たらそちらを読んでくださるとうれしいです
本当に申し訳ございません……………

新しい作品を投稿しました。

そちらもよろしく願います。

再びチート物ですが……………

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3846q/>

魔法少女リリカルなのはstrikers 転生者黒猫の物語

2011年3月12日16時28分発行